
魔法少女なのは マギカW ~希望の道標~

灸CARVE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女なのは マギカル～希望の道標～

【Zコード】

N2795W

【作者名】

炎CARVE

【あらすじ】

魔法少女、終わらせます。

平凡だった小学生、『高町なのは』。

不思議な動物『キュウベえ』と契約して魔法少女となつた彼女は、『ジユエルシード事件』に巻き込まれるなかでその真実を知り、結果として悲惨な運命からは逃れ、そして大切な友達を得たのだつた。

その後魔法少女を待ち受けのはずだった運命は、一人の少女の”犠牲”により断ち切られたという…。

だが、もしも…そこに別の未来があつたなら?

なのはが一旦回避した残酷な未来。しかし、現実から逃れることは許されていなかつた…。

再び直面することになる運命。またもや避けられない戦いに身を投じる少女達。

時を同じくして、一人の魔法少女が時空を歪める。大切な人を守るために。

あつてはならないはずだった、彼女達の邂逅。それが現実となつた時…

最終決戦の幕が、切つて落とされようとしていた。

『魔法少女なのは マギカW』…はじめます。

#0 「序章」（前書き）

いつも、僭越ながら書かせていただいている炎CARVEです。
前作「魔法少女なのは マギカ」の消化不良っぷりが恥ずかしくなり、続編を書いた次第です。

尚、今作にはちゃんとまどかのキャラも結構出るので安心を。

最後に、これは完全な不定期更新です。
でもエターナルことは無いと思います

#0 「序章」

#0 「序章」

私は、なんと無力なんだろう。

少女には、大切な人がいた。

少女は、彼女を守るために戦つてきた。
何度負けても、何度諦めかけても、少女は戦い続けた。何度も、何度も…

しかし、少女は勝てなかつた。

あらゆる武器を持つても、あらゆる策を駆使しても、勝てなかつた。武器を持つ手が動かない。逃げるための足も動きかすことができない。

少女の心は、折れかけていた。

「... おまえへ... おまえへ... おまえへ... おまえへ... 」

薄木林へ意図の口がでかに聞こえる声

それはそれもなく、かがむが彼女の声だった。

彼女は決意の眼差しで少女を見つめる。

「ハサウエイアカデミー」

少女には、彼女が何をしようとしているのか分かっていた。
そしてそれは、最も恐れていること。

「お願い、やめて…っ！」

「…ひうん、やめられない。だって、私が一生懸命考えて出した答
えだもん」

「…ツ…！」

それが何を意味するのか、彼女にも分かっていたはずだった。しか
し、それでも彼女はその道に進む。
彼女もまた、少女を守りたかった。

…少女の知る彼女とはじつにう子だ。誰よりも優しく、勇気のある
子だった。

「…ああ、まどか。その魂を犠牲にして君は何を願う？」

彼女の横にいる…死の商人。全ての元凶にして、彼女の優しさを利
用しようとしている…少女の仇敵。

世界中の何よりも憎いそれを、少女は睨み付ける。これ以上無いく
らいの憎しみを込めて。

…じつして奴を睨むのも、何度目だろうか。

少女は、ずっとそれに踊らされていた。そして今も、自らの敗北を
味わっている。

しかし、彼女はそうではなかつた。その眼は…希望に溢れた未来を
見据えていた。

そして彼女は願いを言い放つ。

「今度…今度…、ほむらひやんにハッピーエンドをつ…」

彼女の願いが、どのような奇跡を起こしたのかは…彼女自身にも分からなかつた。

しかし、それは確かに運命を大きく動かしていた。彼女の力とはそれほど大きなものだつた。

もしかしたら、少女が幸せになる…無数の世界を生み出してしまつたのかも知れない。

これは、多くの世界のひとつかもしれない…また、唯一の幸せな世界なのかも知れない物語。

#1 「平和」（前書き）

序章で書いたとおり、この世界は前作エピローグとは違う世界線です。

具体的には前作からダイバージェンス1%程度離れた感じ。ちなみにタイトルの「W」はWishね。

第一話は回想回。導入ですね

#1 「平和」

#1 「平和」

どこかにある、海に面した町…海鳴市。

賑やかな市街地から離れた所には丘や天然林が広がっており、自然保護区域に指定されているところも少なくない。

こういったところは当然ながら、自然公園として広く市民に親しまれています。

小さい子供が遊んだり、若者達がデートや散歩を楽しんだり、ランニングやテニス等のトレーニングに利用されたり…

「なのは、上だよ!」

ある日の早朝、少女の声が響く。

彼女達もこの海鳴市の自然の中でトレーニングをしていた。

「わっ!」

声に反応してもう一人の少女が上を見る。すると上から降つてくる空き缶。

短い茶色のツインテールが可愛らしい少女 高町なのはは、落ちてくる空き缶を眼で捉える。

：幼い少女に不釣合いなほどの中確さで。

予想外の方向から来た空き缶に一瞬戸惑いつつも、驚くほどの冷静さで反応するなのは。

「いくよ、フュイトちゃん！」

彼女は空き缶を弾き返した…

なのはも相対する少女も、ラケットのような道具は持っていない。
かといって素手で空き缶を打ち返したのでもなく

彼女は、皿らの手から放つた”光弾”によって、空き缶を”撃ち”
返したのである。

なのはの狙い通り、斜め45度で相手に向けて飛ばされる空き缶。
普通に考えれば空き缶はそのままの軌道で放物線状に飛ぶだろ。う。
しかし、上昇する空き缶が頂点に来るより前に、それは快音を響か
せると…相手の少女に向けて、猛スピードで突っ込んだ。

テニスのスマッシュシュを軽く超えた速度で飛ぶ空き缶。少女の身では
反応さえも難しいだろ。

だが、なのはが飛ばした空き缶を見据える少女　フュイト・テス
タロッサ・ハラオウンは、驚くどころか…空き缶の動きが変わった
タネさえも見抜いていた。

…フュイトは見ていた。なのはが空き缶を撃つた直後、もうひとつ
の光弾を放つていたところを。

桜色に輝く弾は、なのはの手から少し上昇し…斜め下に向けて急加
速、空き缶を斜めに撃ち落としていたのだ。

一直線に飛んでくる空き缶に狙いを定めるフュイト。彼女は右手を
構え、空き缶の飛来を待つ。

「…やつ！」

空き缶が右手に触れようとすると瞬間、彼女の長い金のツインテール
が靡く。

フェйтの手から放たれたのは、黄金に輝く光弾。

的確に撃たれた空き缶は、今度は地面と平行に、やはり猛スピードでなのはに向けて飛んでいく。

「はっ！」

なのはも負けじと腕を構える。今度は光弾ではなく、光の壁を生成。空き缶は斜め上に弾き返されていた。

二人の少女、なのはとフェイト。彼女達は一切その場から足を動かしてはおらず、また直接手を触れてさえいない。
空き缶を打ち返しているのは全て少女達の体から出た光…魔法なのだ。

ただの人間の常識では考えられない謎のラリー。

もし部外者が見ていたら幻覚か気のせいだと思つだろう。
だが、これは紛れも無く真実。

二人はただの人間ではなく、『魔導師』である。

空き缶を光の壁で弾いて間髪入れず、なのはは光弾を両手に生成。そして真横に放つ…そしてすぐ、弾が急上昇し、空き缶の上に収束。誘導弾である。

光弾は空き缶を真下、…否、そこにあるフェイト目掛けて打ち落とす。

桜色の光を放つ少女、高町なのは。

彼女は元々普通の小学三年生であったが、ある日…魔法の世界と運命的な出会いを遂げた。勢いのまま魔法の力を手にした彼女は、すぐ命がけの戦いに身を投じることとなってしまい…その時の経験から、戦いを終えた今でもこのような訓練を欠かしていないのである。

ちなみになのはが最初に手にした魔法の力は今の彼女の使う魔法とは全くの別物なのだが… これは別の機会に。

真下に降つてくる空き缶。フェイトはそれに気づくや否や、光の矢を真上に撃ち出す。しかし空き缶の中心ではなく、端の方を狙つて光の矢が命中。勢いを絶やさぬまま、斜め下…なのはに向けて弾丸のようなスマッシュ。

黄金色の光を放つ少女、フェイト・テスタークロッサ・ハラオウン。彼女はなのはと違い、地球ではない魔法の世界…『ミッドチルダ』出身の生粋の魔導師。

フェイトはある目的のために地球を訪れ、なのはと出会う。そこで彼女達は、古代の遺産『ロストロギア』の一種である『ジュエルシード』を巡つて幾度も争い、戦つた。（これは後に『ジュエルシード事件』と呼ばれている）

熟練の魔導師であるフェイトと、魔導師となつたばかりだったなのは。しかしフェイトに勝つための猛特訓が功を為し、なのはは勝利。多くの戦いを経た彼女達にはいつしか友情が生まれ、彼女達は最高の友達となつたのだった。

「やっぱりなのはちゃん達、ほんまに凄いなあ…」

彼女達の激しい攻防を、遠巻きに見ている女の子がいた。

車椅子からなのは達を眺め、ある事件のことを思い出す少女…ハ神はやて。

彼女もなのはと同じく、かつて普通の地球人の少女であり、魔法との不思議な出会いを経験していた。

なのはとフェイトの出会いから、今となつては約一年が過ぎようとい

していた。

その間には、更なる戦い…『闇の書事件』があつた。

危険度の高いロストロギア…他人の魔力を喰らう魔導書『闇の書』に選ばれてしまつたはやて。

闇の書に蝕まれるはやてを救うために、闇の書の完成を目指して奔走した闇の書の部下…四人の騎士『ヴァルケンリッター』。はやてと友達になりながらも闇の書を止めるべく戦つた、なのはとフェイト。

彼女達との出会いと戦いは、はやてと闇の書をその呪縛から開放し、闇の書によつて引き起されたよつとしていた世界の崩壊を防ぐことに成功する。

闇の書 かつては『夜天の魔導書』と呼ばれ、後にはやてに『リインフォース』と名づけられた との別れの後、はやては残されたヴァルケンリッター達と共に、新たな人生を歩むこととなつた。

そして今、なのはとフェイトには『時空管理局』お抱えの正式な魔導師にならないか…という誘いがかかっている。

時空管理局というのは、地球やミッドチルダ以外にも数多く存在する次元世界を監視し保全する大規模な組織である。ミッドチルダに本部を置くこの組織はジユエルシード事件や闇の書事件でも事態收拾に力を注いでいたため、なのは達との関わりも深い。

しかしながらもフェイトもまだ幼いため、はつきりと決めることはまだ難しいようだつた。管理局からも気長に決めるよう言われていて、彼女達は今も考へてゐる途中だつた。

ちなみに闇の書の呪いの後遺症により車椅子生活を余儀なくされているはやてにも管理局からの誘いがかかっていて、ヴァルケンリッター達に至つては既に管理局で働いてゐるといふ。

ちなみに今は事件らしい事件も起きていないので、少女達はのんび

りと平和を味わっていた。

観戦するはやてと、魔法のラリーを続けるのは、そしてフュイト。

…いや、どうやら決着は付いたようだつた。

どうやら、なのはは自ら放つた空き缶の勢いをそのまま返してきたスマッシュに反応しきれなかつたらしい。

慌てて魔法の壁・シールドを出したなのはだったが、シールドの角度調整を失敗したせいで空き缶は地面に突撃してしまつた。

「…今日は私の勝ちだね、なのは」

にこやかに笑うフュイト。

「あ、あはは…負けちゃつた。でも明日は勝つからね…」「…

笑い返すなのは。彼女達は最高の友達であると同時に、良きライバルでもある。

「お疲れー」

車椅子を転がしてやつてくるはやて。傍らには一人の少女がいた。

「あ、はやてちゃんにヴィータちゃん。おはよー!」

「おひ、おはよーつ!」

ヴィータと呼ばれた元気な少女は、ヴォルケンリッターの一人である。残りの三人は管理局に出払つてゐるため、今日のはやての世話はヴィータの役目なのだ。

「…空氣読まないでわりーけど、そろそろ着替えねーと学校遅刻しつぞ?」

「…あーつー?もうこんな時間!?」

なのはが携帯電話を出し、大慌て。同じ状況のはずなのに、なぜかフェイトは落ち着き払つてゐる。

「あ…じゃあなたは、着替えてくるね

「あ、わたしもー!」

「ふふふ…」

急いで帰宅する二人。はやて達は微笑みながら見つめていた。ちなみにやはては運動しに来たわけではないため、既に制服着用、荷物

も準備してある。ヴィータは学校には通っていないため、私服だが。「しかし、ヴィータもよう気がつくな……。ちょっと前よりだいぶしつかりしてきたんとちやう？」

「ば、馬鹿！ やめろよ……っ……」

ヴォルケンリッターの中で最も幼いヴィータは、少し照れ屋なのだ。

「そ、そんなことより……今日転校生が来るんだってな？」

「そういうば……。一体どんな子なんだろうなあ？」

三人の少女がこれから体験する、学校での出会い。それを楽しみにしているはやで。

もちろん、大急ぎで着替えるのは達も同じだった。

どんな子なんだろう……、友達になれるかな……。

しかし、これから訪れる出会いは、なのは達が田を背けていた存在と……再び巡り合わせることになる。

そしてそれは、再び起ころ大きな戦いの引き金になるのだった……。

#2 「新顔」（前書き）

オリキヤラ登場。これだけで原作レイプとか言つな。
あ、ちなみに前の世界線でアリサが契約するのは小五辺りといつ設定。

つまり、この小説にバーニングアリサは出できませんよ、と。

では、相変わらず文章力のない私の拙い小説ですが、よろしくお願
いします。

（今回は短目かも）

#2 「新顔」

#2 「新顔」

「おはよー…っ」「どうにか遅刻せず、— 私立聖祥大附属小学校の自分達の教室に着いたなのは、「遅いぞなのはー！」

「ま、まーまー…」

最初に挨拶してきたのは二人のクラスメートだった。勝気でちょっと生意氣?な少女、アリサ・バニングス。やや大人しめな少女、月村すずか。

彼女達は昔からなのはの親友で、魔法の力を持たない一般人だ。しかし闇の書事件の際にフェイトやはやてとも知り合い、すぐ友達になつているうえに、同事件が終わつた時に魔法についてもある程度は話されている。

ちなみにフェイトとはやはては先に学校についていたようで、アリサとすずかに続いて挨拶をしてきた。

「おはよう」「ぞーーまーす！今日は知つての通り、転校生がやつきましたよー！」
なのはが挨拶を終えたすぐ後に、入ってきた先生。既に転校生の噂で持ちきりだった教室。なのはにはこの話に入る時間が用意されていなかつたようで、一瞬凹んでいたようだ。

しかしそうすぐに立ち直り、転校生に興味を示す。

「さあ、どうぞ！」

先生の声と共に、入つてくる転校生。

「お、おはよーいります…」

教室に来たのは、ややおどおどした感じの少女だった。深い紫色の短い髪、宝石のように澄んだ青い瞳、加えて小柄で華奢な体と、保護欲が沸いてくるような…それでいてどこかミステリアスな印象。

クラスの視線の集まり具合はなかなかのものだつた。

「ま、眼山つきよ…です、よろしくお願ひします…」

やや俯き気味で挨拶する少女、つきよ。

「つきよちゃんは、家庭の事情で　学校から転入してきたそうです。皆さん仲良くしてあげてね」

「前の学校どうだった！？」

「得意な教科とかない？」

「前はどんなところに住んでたの？」

「そのキーホルダーどこで買った！？」

「後で一緒にお昼食食べよーっ！」

「あ、あう…」

「…デジャヴ」

紹介が終わつた直後の出来事を見たのは達は、揃つて同じ台詞を吐いた。

無理もなかつた。過去にフェイトが留学生として私立聖祥大附属小

学校に来た時も、このように猛烈な質問攻めに遭つていたのだ。

とりわけ実際に質問されていたフェイトは空いた口がふさがらないようだ…。

なお、当時は学校に行つていなかつたはずだったはやても車椅子の上で同じ反応をしていたが、これはフェイトが来た時のことを聞いていたからだ。

「あーもひ、はいはい質問は順番に…フェイトのときとここ全く皆つたら…」

結局、フェイトの時と同じようにアリサが仲裁するのだった…。

ほとぼりが冷めた頃になつてよつやく、なのは達がつきよに挨拶をする。さすがの空氣の読みっぷりである。

「わたし、高町なのは。よろしくね」

「フェイト・テスター・ララオウンだよ」

「八神はやてや。よろしくなー」

「アリサ・バニングスよ!」

「わたしは月村すずか。仲良くしようね」

順番に挨拶する時は、決まってなのはが最初になつてしまつのは…このメンバーにおいては最早常識だった。

「あ…よろしくお願ひします」

つきよも大分落ち着いてきたのか、先程よりは言葉がしつかりしている。

「えど、アリサ…さん? 先ほどは…その、あつがとうござります。

あのような状況には、あまり慣れてなくて…」

しつかりして…はいたが、またもや調子がおかしくなつてきていた。心なしか顔が赤いところを見ると、恥ずかしいのだろう。

「いいつての。それより敬語なんて使わないでも…」

「あ、ごめんなさい…癖なんです」

どちらからともなく笑いあつアリサとつわよ。一人は早くも通じ合つたようだ。

そして昼休みには、既に六人で一緒に歩く姿があつた。といつても

はやては車椅子だが。

それにもしても、あつといつ間にじりじりまで打ち解けることのできるなのは達のパワフルには物凄いものがある。

「へえ……、すずかさんの家には猫さんがたくさん……少しごひやりましいです」

「あ……じゃあ、今度みんなで遊びに来る？」

こんな他愛ない会話がしばらく続く。

しばらく経つて、不意につきよが口を開いた。

「あ、あのっ！」

今までになくはつきりした口調で。

「私、こんな性格だから昔から友達がいなくて……、まともにお話しするのはアリサさん達が初めてなんです。本当に……ありがとうございます」

真っ直ぐな瞳で話すつきよ。その心を知つてか知らずか、いつものノリでアリサが口を開く。

「なーに改まっちゃってんのよ、あたし達もつ友達でしょ？」

「アリサさん……！」

つきよの皿には、薄つすらと涙が浮かんでいた。

下校時刻。

なのはとフロイトは帰宅方向の違う他の四人と別れ、一緒に帰路についてていた。

「つきよちゃん、何だか変わった子だったね……」

「うん、でも話してみると結構普通だったよね。恥ずかしがり屋さんみたいだったけど」

つきよの話題で笑いあうのはとフロイト。いつしかこんな想いが浮かんでいた。

「（つきよちゃんの事、もっと知りたい……）」

友達になつたばかりの彼女達にこの発想が出て来る」と眞体は、至極当然のことといえよう。

だが、何となく…こんな考えも出てきてしまつていていた。

「（彼女のことを、これ以上知るべきではない）」

少女達にはこれが警告のようにも思えた。

しかし、その意味を理解するには…少しばかり、気が緩みすぎていたと言えよう。

#3 「遭遇」（前書き）

第三話。

この話を以つてある意味ではプロローグが終わると思ひます。
前半の進み方は完全にアドリブで書いた。
うまくいったと思いますが、うまく行き過ぎて
伏線関係とか怖いw

#3 「遭遇」

#3 「遭遇」

つきよが転入して数日。

彼女は新しい学校にも慣れ、なほは達とも互いの家に遊びに行く程度まで親しくなっていた。

「それでね、お兄ちゃんつたらね……」

「ほなうひのシグナムかて負けておらへんよ、……」

今は六人ともすずかの家で遊んでいる。

ちなみにシグナムというのは、はやての守護騎士であるヴォルケンリッターの一人で、四人のリーダーである頼れるお姉さんだ。

他には母性溢れるシャマルに、唯一の男性で『守護獣』のザフylla、後はつきよが来た日の朝に共にいたヴィータがいる。

「…皆さん、いい家族を持つているんですね」

口を開いたつきよ。その笑顔は、どこか寂しそうだった。

「そういえば、つきよの家族ってどんなのよ?」

「…わたしのお母さんはずっと昔に死んじやつて、お父さんも単身赴任でほとんど家にいないんです

俄かに重くなる空気。

「…」めん

「こ、いいんです! 今は皆さんがいるから寂しくありません!」

慌ててフォローを入れるつよ。

この時の言葉は本心であると同時に何気なく言つた言葉でもあつたが、これを少し重く受け止めた者もいた。

「…つきよぢやん、わたしも同じや」

少し遅れて、はやでが言葉を返す。

その過去を知る四人の注目を浴びるが、かまわざ言葉を続けた。
「わたしも家族は昔にいなくなつちゃつて、ちょっと前までは一人ぼつちだつたんや。

でも最近シグナムたちが来てくれて、みんなとも会えた。今は、本当に幸せや」

はやてもつきよと同じ、孤独の寂しさを知るものだった。

彼女達だけではない。なのはも幼少時代、家族に構つてもらえなかつた時があつた。

フェイトも実の母に冷たくされていた経験を持つ上に、友達もなのはが初めてである。

ひねくれ者だつたアリサと引っ込み思案なすずかも、なのはと一悶着あつてからようやく親友になった。

誰もが、つきよの気持ちを理解していたのである。

「ありがとう…ありがとう…っ…わたし、みんなを絶対に、守つてみせますっ！」

唐突に叫んだつきよ。その意味を考えたなのは達もそれに答える。
「つきよちゃん…わたしも、つきよちゃんに何かあつたら、絶対に助けるからねっ…」

「…私もだよ。つきよは大切な友達だから」

「友達が困つてる姿なんて…見とうないからな」

「悩みとかあつたら、いつでも言つてね」

「あたしだつて力になつてみせるからー！」

この時なのは達は、つきよの言つた『守る』という言葉の意味を理

解していなかつた。

そして、あまりにも早くそれを思い知らざることになる。

「なのは…何だか、嫌な感じがする」

「フェイトちゃんも…？」

なのはとフェイト、二人の帰路。

友達と遊んだ帰りだというのに、一人は怯えていた。

…というより、確かに感じていたのだ。不吉な存在の接近を。

危険は、唐突に訪れた。

音もなく、突然歪む世界。

「！？」

気づくとなのは達は、見たことがない世界にいた。

幻想的な、しかし吐き気を催すほど気持ちの悪い風景。

「…！？け、景色が…！」

「これって、もしかして…！？」

彼女達はこの現象を知らないわけではない。心当たりがあつたのだ。しばらくすると、不気味で禍々しい影が姿を現した。出来損ないのロボットを思わせる、ゴツゴツした影。

それを見て、なのは達は確信する。

「魔女の、結界…つ…！」

- Beatrice -

ガラクタの魔女。その性質は無心。

自我も本能も殆ど忘れ去り、ほぼ完全に無秩序な動きをしている。
頑丈な紐などの道具を用意すれば、操り人形にできてしまうかもし
れない。

かつて…ジュエルシード事件のとき、なのは達はそれと相対してい
た。

絶望から生まれ、世に呪いをもたらす怪物『魔女』。

その正体を知る彼女達にとつて魔女との戦いは辛いものだったが、
それ以来全く現れていないために半ば忘れかけていたのだ。
日常を満喫していた少女達は、悲しい現実を思い出し…

「ど、どうしようつ！」

「なのは…可哀想だけど、やるしかない。あの子だつて苦しんでい
るんだから」

「…うん」

眼に涙を浮かべ、戦う決意をする。樂にしてあげるために。

「レイジングハート、お願い」

『勿論です、マスター』

なのはの武器デバイスであり相棒である魔法の杖、レイジングハート。
ミッドチルダ式の魔法を使い始めてからずっとと共に戦ってきた仲間。
時にはなのはに助言をしたり、訓練の監督をしたりする、頼もしい
先生でもある。

ちなみに今は収納してあるため赤い球体の形態をとっている。

「いくよ、バルディッシュ」

『了解』

フロイトの武器であるバルティッシュも、主に応える。

その時だった。

「二人とも下がってくださいっ！」

後ろからの、聞きなれた少女の声。

二人は思わず振り向くが既にそこには何もなく、代わりに魔女のいる位置から爆音が響いた。

「なっ！？」

音のした方にあつたのは、粉々になつた魔女の残骸と…拳を突き出した、ひとつ影。

梅紫色の炎を纏つた拳、これと同じ色が散りばめられた衣装、短い紫の髪。

少女は、こちらを向いた。

「よかつた…怪我はないみたいですね」

眼鏡の奥から覗く透き通つた青い瞳に、なのは達は絶句していた。

(つわよ…ちやん…！？)

#4 「困惑」（前書き）

説明回ですね、分かります。

ちなみにつきよのソウルジムは梅紫色ですが、
紫とピンクの中間色を考えたらこうなりました。

#4 「困惑」

#4 「困惑」

魔法少女。

なのは達魔導師とは違う存在。

彼女達は『キュウベえ』と呼ばれる不思議な生き物と契約すること
で魔法の力を得る。

魔法少女は契約時に一つだけ願いをかなえてもらえるが、その代償
として魔女との戦いを義務付けられる。

炎拳の魔法少女、眼山つきよ…

彼女も、キュウベえと契約した一人だった。

「…私、ちょっと前まで生き甲斐が無かつたんです」
ガラクタの魔女を倒した次の日。

なのは達五人は、つきよの話…魔法少女の事を聞いていた。

「できることなんてほとんど無くて、私は世の中に必要とされてい
るのかが分からなくて思いつめていた時に、あの子が来て…私は『
胸を張って生きていく位に強くなりたい』そう願いました」
つきよが懐からおもむろに何かを取り出す。

戦った時の衣装と同じ梅紫色の宝石。魔法少女の証、ソウルジェム
だ。

「魔女との戦いはほとんど一人ぼっちですけど、人々を守るために戦えて…何より、今までの何もできない自分じゃなくなつて嬉しいんです」

そう言つてふと田を下ろすと、ソウルジエムが少し濁つていることに気づく。

「あ…昨日の分の回復忘れてた」

若干顔を赤らめながら懐からまた何かを取り出す。それは黒い塊だった。

魔女の卵『グリーフシード』。魔女を倒すことで手に入り、これによつて魔法少女達は魔力を回復できる。

グリーフシードをソウルジエムに当てる…そこからソウルジエムの濁りが吸い込まれていく。

程なくして、ソウルジエムは輝きを完全に取り戻した。

「皆さんは、私の初めての友達です。だから、もし魔女に襲われても…必ず守りますから！」

語るつきよはいつもと雰囲気が違う。先日までのよつな少しあざおどとした感じではなく、自信に溢れていた。

魔法少女としての自分を誇りに思つているのだ。
なのは達は、その話を黙つて聞いていた。

普段使われないような言葉が出てきても、質問の一つさえしなかつた。

しかし、五人とも…心の中では打ちひしがれていたのだ。
全員、同じ理由で。

彼女達五人は、つきよに出会つ前から、魔法少女についてを全て知つていた。

そう、『全て』…

：魔法少女の、裏の真実さえも。

キュウベえとの契約…それは、『少女の魂を器に入れること』である。

魂の器…それこそが『ソウルジエム』なのだ。残された少女の体はいわば抜け殻。彼女達は、ゾンビのようないにされているのだ。

そして、ソウルジエムは濁る。魔力を使うだけでなく、心に絶望が生まれた時にも。

その宝石が完全に濁りきり、漆黒に染まつた時…

ソウルジエムはグリーフシードとなり、魔法少女は…魔女となる。

願いをかなえたことによる『希望』の宝石が、『絶望』により黒く染まつて生まれたのが魔女。

すなわち、全ての魔女は魔法少女が絶望した成れの果てであり、全ての魔法少女は魔女になりうるのだ。

魔女になる運命の魔法少女を生み出している、キュウベえこと『インキュベーター』。

その目的は、宇宙の寿命を延ばすためにエネルギーを確保すること。希望が絶望へと相転移する瞬間には、大きなエネルギーが発生するという。

彼らは少女の魂をソウルジエムに閉じ込めて絶望エネルギーの回収を成している。

いわば魔法少女達は、インキュベーターの家畜のよつなものなのだ。

時空管理局に協力したミッドチルダ式魔導師、高町なのは。

彼女が最初に手にした魔法の力は、『魔導師』としての力ではなく

『魔法少女』としての力。

しかしジュエルシード事件の時、フェイトとの出会い等を通して時空管理局に関わることができたおかげで、魔法少女の運命から解放され、ミッド式魔導師となつたのだ。

そしてフェイトも、魔導師となつたのはとの最後の戦いの後、敗北とその先にある運命に絶望していた心の隙を突かれ、ある願いによつて『魔法少女』となつた。

この時の願いによつてジュエルシード事件は大きく展開。新たなる魔法少女も出現し……なのは達は、彼女が魔女となる瞬間を見る。目の前で魔女となつた少女は、なのは達の手で葬られたのだ。

「魔法少女にインキュベーター……僕としたことがすっかり失念して
いた。くそっ！」

マンションの一室、フェイト達の部屋。中学生くらいの少年が深刻
そうに拳を叩きつける。

彼の名はクロノ・ハラオウン。時空管理局執務官にして、フェイト
の義兄である。

「まあ……仕方ないのかもね。あの時以来全然出ない上に、闇の書事
件まであつたから……」

エメラルドグリーンのボニー・テールが特徴的な女性が答える。クロ
ノの母、リンディ・ハラオウンだ。

彼女は時空管理局提督であり、ジュエルシード事件や闇の書事件に
おいて活躍。

闇の書事件の後、天涯孤独となつていたフェイトを養子にとつたの
も彼女である。

リンディの言う通り、ジュエルシード事件の時に地球に作られたイ
ンキュベーター対策団体は、魔法少女の確認の難しさもあいまつて

同事件以来成果を上げておらず、更に闇の書事件関係で調査に割く時間や人手も殆ど無くなってしまっていた。

「何とかならないんですかっ！」このままじゃ…つきよが…つ…！」

叫ぶアリサの瞳には涙が浮かんでいた。

はやてやアリサ達には、魔法少女とは関係が無い。しかし闇の書事件の後、三人には管理局等の事の他に、魔法少女の事についても一通り聞いていた。

「…申し訳ないが、今は何も行動できない」

瞳を閉じ、つぶやくクロノ。

「そんなんっ！？」

時に非情とも取れる判断をする彼らでも、本当は別の行動を取りたかったのだろう。この事を知っているなのは達、彼らのことも聞いていたはやて達も、驚き以上の言葉は出せなかつた。

「ジユエルシード事件の時、インキュベーターになのは達の顔が割られている。話を聞く限りだと、つきよは奴を信じきっているようだから、ここで下手に何かしてしまえば、彼女に敵視されることになるかもしれない。そうなれば…ほぼ確実に、彼女を助けることは不可能となる。だから…今は様子を見るしかないんだ」

「…それが賢明だよ、管理局のみんな」

「…？」

突然響いた声。

なのは達には聞き覚えのあつた、あの声だ。

「インキュベーター…つ…！」

そして、声の主が姿を現す。

猫のような小動物であり、紅く瞼のない瞳に、腹の紅い模様。耳からたれた長い毛。

「なのはに…フェイトだけ。久しぶりだね

「キュウべえ…、一体何をしに来たの…？」

明らかに敵意を伴つた、なのは達の視線。

それはそうだろつ。彼女達が契約する際、魔法少女の裏の側面…『知られたくないこと』は一切言われなかつたのだから。

「君達に下手な行動を起こさないようにしてもらいたいだけさ。つきよにはまだ死んでほしくないんだ。最近、海鳴にも魔女が出てくるようになつている。君達に任せると、グリー・フシードの回収ができるないからね」

インキュベーターの言つことは正論だ。彼らはグリー・フシードを回収することで、母星にエネルギーを供給している。

「安心してくれ、つきよにはなのは達のこととはまだ言わない。君達には、今はまだ友達でいてほしいからね。まあ管理局のこととはもう話したけど」

「…つ！？」

彼の言葉で、可能性でしかなかつたクロノの最悪の予測が現実味を帯びた。

これでもう一手な接触は封じられたこととなる。

「やつぱり、あなたは…つきよちゃんをつ！…」

「当然じゃないか。そもそも魔女になつてくれなきゃ意味がないからね」

そういうつて消えるインキュベーター。

「彼らのほとんどには感情が存在せず、論理的な思考のみしかできないため、説得はほぼ通じない。

更にいくら殺しても何度も生き返るため、処理もほぼ不可能なのだ。

後に残されたのは、呆然とする少女達だけだった。

「クロノの言つた通り、本当に打つ手が限られてしまつたわ…」

最初に口を開いたのはリンディだつた。

インキュベーターは狡猾だ。下手に策に出ても、すぐに対策あるいは利用されてしまう。

「つかよ……あこつに踊りをされているだけだってことを、なんとかして伝えられたから……」
アリサが不意に零した言葉。

しかし、なのはは逆転の一手をそこに見出していた。

「それだつ……」

「……？」

「わたしたちがつきよみちゃんともつと仲良くなつて……管理局とかキユウベえのことを言つても、信じてもうるようになればいい！」
これまで、戦いを重ねることで友情を育んできたなのは。
彼女はつきよと戦う可能性も考えていた……のかは分からない。
しかし、現状ではかなり望ましい選択と言えるだらう。

「そうか……。奴らは感情についての理解が乏しき。これなら……」「……眞也んは今までどおり彼女に接するということね。分かつたわ。ただし……しばらくは魔女が出たら彼女に任せせるよう」「……はい！」

いつして場は解散となり、少女たちは帰路に着いた。これからこのことを考えながら……。

「やつぱつ、あの時の子が……」

ただ一人、はやてだけは少し前のある出来事を思い出していた。

#5 「疾風」（前書き）

はやて回つていこうだけだつたり。

それにしても、大学は始まるわ、アイデアは浮かばないわで
早くも挫折しそう・・・

頑張れ、僕。

投稿ペースは落ちるかもですが、絶対に書ききつてみせる

#5 「疾風」

#5 「疾風」

一年ほど前のことだった。

病気を持っているために通院を余儀なくされていた少女、八神はやて。彼女には両親がいない。それゆえ幼い頃から家族のぬくもりを失っている。

しかも病気のため学校にも行っていないため、友達もいない孤独な生活をしていた。

はやはては十歳に満たない子供でありながらこうして一人で暮らしてたのだが、生きるための資金は親の友人が何とかしてくれていたために何とかなっていた。けれど料理や買い物は一人でこなしていたのである。

（闇の書事件の時に、資金をくれていた『親の友人』の正体を知ることになる）

はやはては、かかりつけの女医以外には一切他人とのかかわりを持つていなかつたため、いつも寂しい思いをしていた。

「（せめて一人でも、仲の良い友達がほしい…。）

切つ掛けがある度にこのようなことを考えていたが、所詮病弱な身。自分で動くこともほとんどできず、車椅子での移動がやつとなのだ。

友達作りは、半ば諦めていた。

そんなんある日の夜。来訪者は訪れた。

「はやて、はやて…」

自分を呼ぶ声。

「（…？何やねんの声…。夢…）」

あつと友達がほしことこう想いが夢に出でているのだろう、と思つた
はやてはそのまま再び眠つていつとした。

「はやて、はやて…」

またもや聞こえる声。

「（おかしいなあ、まだ聞こえてる。でもどこから聞こえてるのか
分からへんし…やっぱ夢か）」

そう。この声は耳からは聞こえていなかつた。
頭の中に直接語りかけてくるよつたイメージ。所謂テレパシーのよ
うな声だつた。

「はやて、はやて…」

「う、うーん…」

さすがにしつここと感じたのか、田を覚ましたはやて。
ぼんやりと見えたものさ、白い影だつた。

「（にゃん…？どこからとは、この子が呼んだんとちやうつか？…
まさか）」

その影は、しかしそく見ると猫とは違つていた。
耳から長く毛が房のようにひきこむ上に、その田は赤く、ガラス
球のように丸い。

どの生き物とも一致しないファンシーな姿。
しかも、

「やつと起きたね、八神はやて

突然言葉を発した。

「うわっ！？しゃべった…、あの…あなたは何や？」

「僕の名前はキュウベえ。君にお願いがあつて来たんだ」

「お願い？」

「僕と契約して、魔法少女になつてほしい」

「魔法…少女…」

突然このようなことを言われて戸惑ははやてだが、内心わくわくしていたのも事実だ。

彼女は昔、魔法少女ものの子供向けアニメを見たことがある。こういった作品には、多くの場合魔法少女のパートナー…アニメのマスクとして不思議で可愛い動物が登場するものだ。目の前に居るキュウベえは、まさにそのマスクを思わせる雰囲気だつた。その彼が今、魔法少女にならないかと誘つている。つまり、自分はこれから…

「わたしが、その魔法少女になるんかあ…。楽しそう！」
と一瞬素直に喜んだはやてだが、すぐに魔法少女もののセオリーを思い出す。

「あ、でもそうなつたら何かと戦わなあかんの？」

「よく分かつたね。魔法少女になつた者には、『魔女』と戦う使命を課せられるんだ。でもその代わり、魔法少女として契約した時に…君の願いを叶えてあげられるよ」

「願いをかなえる…？じゃあ、わたしの足も治るんか？」

「足が悪いのかい？その程度なら造作もないさ。君ほどの素質がな
くとも可能なくらいだ」

「…！」

はやは一瞬、呆然とした。

自分の抱えている障害が重いものだということは昔から知つてゐる。

簡単には治らないものだという事もだ。

それが今、治るチャンスが与えられたことになる。

しかし彼女にはもう一つ願いがあつた。『友達がほしい』である。

「でも願い事つて、一つだけやろ?」

「まあね。…友達でも欲しいのかな?」

「（えくつ）」

はやては少し悩んだ…が、答えを出すのは早かつた。

「そつちは、ええや。足が治つたら自分で歩いて探します」

「といつことは、君の願いは『足を治す』ことでいいかな?」

「…お願いな」

はやての返事を聞き、キュウベえは耳から生えた毛をはやてへと伸ばす。契約の儀式だ。

彼女に『えられた、希望という餌。これは幼いはやてにはあまりにも魅力的なものに感じていた。

この誘惑に乗つてしまつ』ことが、近いつちに絶望をもたらすことなど露も思わずにある。

そして少女は、何も知らぬまま地獄へと身を墮とす…

はずだった。

（バチッ！…）

「…？」

突然の放電のような音とともに、キュウベえの毛が、灼熱の炎にでも触れたかのように引っ込んだ。

「ど、どないした！？」

「拒絶反応…。これは大物のロストロギアか何か…？だとするとこの子の素質は…」

なにやらぶつぶつと呟くキュウベえ。しばらくなしてはやてに向こうる。

「…残念だが、君とは契約できんつにない」

「えー」

「君ほどの素質の子を野放しにしておくのは実にもつたいないが、君は魔法少女にはなれない体质のようだ」

残念に思つはやてだつたが、すぐに考え直す。

魔女との戦いは厳しいかもしない上、そもそもこんな都合のいい奇跡がそう簡単に転がつてくる筈がないのだ。

「…わかった。今のは夢つてことにしようと」

「それでお願いするよ。じゃあね」

キュウベえはそう言つと、どこへともなく去つていぐ。

「（結局なんやつたんやろ…あの子…）」

「主はやてに、そんなことが…」

「う、うん。つこさつ今まで忘れとつたけどな。ああして会つて、また見たから思い出したんや」

そして時刻は戻る。インキュベーターの話を聞いたはやてが、今日聞いたことと自分の回想を打ち明けたところだ。。

仕事を終えて帰つてきていたヴォルケンリッターの四人がその話を聞き、その後最初にこうして口を開いたのが、ヴォルケンリッターの将・シグナムである。

「けどどないして契約できなかつたんやろ？」

「…強力なロストロギアの多くには、インキュベーターに対する抗体のようなものが備わつていると聞きます。闇の書・夜天の魔道書にも、そういう機能があつたのではないか」

続いてシャマルも口を開く。

「そりいえば、なのはちゃん達もそう言つてたな」

はやても闇の書事件の後に、なのは達からインキュベーターの存在について聞いていたが、初対面の時の印象とかけ離れていたので、いまいち思い出せないでいたのだ。

「でもよ、もしその機能が無くて、そのまま契約していたら…」
ヴィータが思つたことを何気なく口にしたが、最後まで言つ前に黙り込んでしまつた。

勘のいいヴィータのこの様子を見て、他の四人も押し黙る。

…はやてが闇の書に飲み込まれた時の事を、思い出してしまった。

彼女は昔から闇の書に身体を侵食されていたが、それは闇の書が完成すれば止まる筈だった。だからヴォルケンリッター達はその完成を急いでいた。

もちろん、はやてには知らずにである。闇の書の完成には他人の魔力を奪う必要があるため、はやてはそれを良しとしていなかつたのだ。

騎士たちが闇の書の完成を目指して活動していたことは、実は、はやても薄々気付いていたが…突然そのすべてが無駄だといつ事を、ある者から告げられた。

残念ながら、彼らの策略によりその時既に闇の書は完成していため、覚醒には彼女の意思がトリガーとなっていた。

絶望の宣告を受けたはやはては、闇の書の真の主として覚醒を遂げ、闇の書の意思の中に封印されてしまつたのだった。

(すぐになのは達に救出されることになつたが)

「（悲しみとかそういうのがわたしの中で爆発して…何にも分かんなくなつとつたつ…）」

あの時の、まさに『絶望に呑まれる』感覚。

それは、いつかのは達から聞いた魔法少女の真実 魔法少女が絶望し、魔女となること。その時の感覚も、きつと…。

「…はやて、過ぎたことを考えるのはやめましょ」

「あ

我に返つたはやて。確かに今は無事である。魔法少女にならずに済んでいたのだから。

「リインが守ってくれてたんか…おおきに…」

「うつむかへ笑顔の戻つた主を見て、騎士たちも安堵したようだ。

「よし、つかよちやんの」とせわしげに言つた通りやから、みんなはいつも通りでええよ

「はいー。」

少しうして、八神家に住む五人の日常が、再び戻つてくれる。

つきよに真実を話すのは、もう少し後。

それまで、みんなで仲良くしていればいい。友達の言葉は、きっと信じてくれるから。

なのはだけでなく、少女達は最初から皆同じ思いだった。だからこそ作戦の決定に誰も異を唱えなかつたのだ。

この夜、少女達は少し先のこと…打ち明けるときの事を案じながら眠りについたのだった。

#6 「魔女」（前書き）

いつものように遅い更新ですね。
ちなみに、今のところ出でる魔女は全部オリジナルです。
名前とか性質とか考えるのもんじくせこけど楽しい。
あ、そういう。はやて回はもつなこと思ひ

#6 「葛藤」

#6 「葛藤」

- V i r g i n i e -

水晶の魔女。その性質は潔癖。

ありとあらゆる汚れを憎んでおり、汚れたものを見るやいなや使い魔をけしかけるが、自身は何もしない。
この魔女を倒したくば、とにかく汚いものを用意して投げつけるべし。

「襲われてませんかっ！？」

「へ、平気だよ…つきよちゃんこそ、大丈夫？」

「大丈夫です、この程度」

隅のほうにかたまっているのは達を尻目に、炎拳の魔法少女つきよが舞う。

両拳に炎を纏わせ、近づいてくる使い魔 篠や雑巾の姿をしていた を片っ端から殴り倒していく。
どんどん落とされていく使い魔だが、魔女も次から次へと生み出していく、一向に数が減らない。
つきよは、防戦を強いられていた。

「（こ）れじゃキリがない…」

作戦決定から数日後。今日はなのは達とつきよは皆一緒に出かけていたのだが、運悪く魔女に出くわしたため、つきよ以外はこうして見守っている。

もしなのはとフェイドが加勢すれば、この状況も覆されるだろ？。しかし、状況はそれを許さないのだ。つきよの前で魔法を使つたら『魔導師』であることが露呈する可能性が高く、その上既に、つきよはインキュベーターから管理局が敵だと聞いている。

結局なのは達は、加勢しようにもできない状況なのだ。

そしてつきよは未だに使い魔の総数を減らせずにはいる。いつの間にか、彼女の顔に疲れが見え隠れしてきた。

それに気づいたのか、敵の大部分が一斉につきよに群がる。

「…！」

ところが、意外にもつきよはこの状況をチャンスと受け取っていたのだ。

襲い掛かってきた使い魔達に鋭い回し蹴りを放ち、その多くを殲滅する。一気に大量の使い魔が消えた事により、一瞬ではあるが…敵の総数が減った。

「（今だっ！！）」

つきよはこれを見逃さない。右手にひときわ大きな炎を宿すと、薄くなつた敵陣に猛スピードで突つ込む。

「ヘブンリー・インパクトオオ！！」

そしてその勢いのまま、魔女に必殺のパンチを見舞つた。

「ふう…、みんな無事でよかつたです」

戦いは、つきよの勝利に終わった。

「つきよちゃんも大丈夫だよね？」

「当然です、これでもそれなりに戦つてますから」

満面の笑みで答える。なのは達はつきよの力量に内心驚いていた

め、ベテランというのに嘘はないのだろうと思える。

いつもの雰囲気を取り戻し始めた少女達。調子を取り戻したアリサ（実は一緒に居た）は、浮かんだ疑問をストレートに口にする。

「ところで、『ヘブンリーインパクト』って何よ？」

正にストレート。他の全員が言つて憚っていたかも知れないが、真相は誰も知らないといつ。

「あ…っ、あれは…／＼／＼」

「も、もしかして聞いちゃまずかつた…？」

「い、いえ。人前であれを言つたのは初めてでしたね…」

皆の予想に反してすぐに立ち直つたつきよは、呼吸を一回整えてから答える。

「あーほら、一応正義の魔法少女…ですから、必殺技かなんかあつた方が様になるじゃないですか？だからいつもはああして叫んでたんですけど…、あう、人に聞かれると恥ずかしい／＼」

顔を真っ赤にして答えた…その言葉にも、全く嘘が感じられない。つきよは、正直な子だった。

しかしそれ故に、なのは達全員がある恐怖を抱いていた。

そして、それはあまりにも早く現実となつた。話題をそらすように

…つきよは言つてしまひ。

「ど、ところで皆さん…『時空管理局』って知つてますか？」

「（…シ…！）」

今はまだ聞きたくなかった事を聞き、少女達は、平静を装つのに精いっぱいでいた。

「えーっと、時空管理局…てと？」

「確かキュウべえが、『魔法少女の敵』だつて言つてました」

特に気にする様子もなく話を続ける。どうやら、心当たりがあることは気付かれなかつたようだ。なのは達は、真実を知られることへの恐れよりも…友達に隠し事をしなければならない後ろめたさの方が勝つっていた。

「理由は分からぬけど、魔法少女を人間に戻したり、キュウべえ

の命を狙つたりしているみたいで。キュウベえは魔女からみんなを守るために魔法少女を育ててるのに…！」

「……」

違う。奴はそんなに優しくはない。人間を家畜か何かとしか見ていない。

しかし管理局が『魔法少女を人間に戻したり、キュウベえの命を狙つたりしている』ことは、紛れもない事実。

インキュベーターは、絶対に嘘はつかない。しかし都合の悪い事実は口にしない。

ある魔法少女が真実を隠す訳を聞いたことがあるが、その理由は、『聞かれなかつたから』である。

それはそうだらう。魔法少女にはつきよのよつに自分達を正義の味方か何かだと思っている子も多い。もちろん願いの代償として割り切つている子も多いが、それでも自分が利用されているだけだとう事など疑いもしない。

魔法少女となる子には思春期が多く、インキュベーターはその時期特有の精神の不安定さにつけ込むように契約に持ちかけてくる。その上、そのような時期の少女は『契約』という言葉の恐さも知らないのだ。ましてそれよりも幼く純粋で、おまけに心に不安を抱えたつきよが、自分を助けてくれたインキュベーターの事を疑えるだろうか。

「時空管理局は『魔導師』っていう人たちを送つて活動しているみたいで、最近その人たちに気付かれたつて。いつ来るかもわからないみたいなんです…」

「…じゃあ、もし管理局の人と会つたら、つきよちゃんはどうするの？」

これはなのはとフロイトが、どうしても聞いておきたかったこと。場合によつては、つきよと戦わないといけないかもしれないから。もちろん、戦う覚悟はできる。だけど、つきよなら話せば分かってくれるかもしれない。そうなつてくれれば…

「私は…戦えます。でも、もし話し合いで解決できるなら…その方がいいに決まります！」

…そうなってくれれば、もう何も怖くない。

「そ、そうだよねっ」

つきよにはばれなかつたが、やはり誰もが安堵していた。つきよはいい子なのだ。少なくとも話を聞かないような人間では決してない。彼女も、平和を望んでいたのだ。

「（「）めんねつきよちゃん…でも、信じてるからね…」」

こんなやつとりがあつてから、更に数日。

- F r a n n i s k a -

泥の魔女。その性質は怠惰。

努力する人間に對し、常に嘲笑を向け続ける。

彼女の餌食になる人間は、大抵が夢半ばで諦めかけた者。再起しようととする心に囁きかけ、結界へと誘い込む。

自らの存在に意義を感じたことがないが、本人はそのことを気にしている。

魔女の暗い結界の中、変身したつきよが宿す炎がひときわ輝き、舞い踊る。

だが、決して攻撃の快音は響かない。

「はあっ…はあっ…」

つきよの拳では決定打どころか有効打さえも打えられていなかった。

珍しく、つきよが苦戦を強いられていた。

それもそのはず、今回の敵はスライム状の魔女。その特性ゆえ、あまり打撃が通じない。格闘メインのつきよとは相性が悪いといえる。

「つきよちゃんっ！もう逃げようよ…！」

「私は逃げません……とこりよつ、なのはさん」を逃げてください

！」

今日、こんなやり取りがもう何回も繰り返されていた。しかしながらの声は届かない。つきよは戦いを続ける。

「私が逃げたら…一体誰がこの魔女をやつっけるんですかっ！？」
無理もなかつた。現状この街には他に魔法少女がいないため、つきよは自分が魔女から人々を守る存在だと思つている。否、責任を感じていた。

もしかしたら、勝てないと分かつてゐるかもしね。しかし元々の正義感、そしてそれ以上に友達を守りたいという思いが逃げることを許さないのだ。

（つきよは知らないが、同じ町に魔法少女が複数居た場合はグリーフシードの取り合いになることもしばしばある）
「でも…つ…！」

叫ぶなのはを尻目に、つきよは襲いかかる触手をかいくぐつて魔女を殴りつける。だが、泥の体はパンチの衝撃をほとんど殺していた。仕返しどばかりに魔女が勢いよく泥を飛ばす。飛び退つて避けたつきよは…ぬかるみにはまつてしまつた。

「うわっ！…そんな…」

気高き魔法少女の瞳に絶望の色が宿る。

「つ、つきよちゃんっ！？」

我慢できずに駆け寄るのは、つきよはそれに気づくと、笑顔…明らかに作り笑いだとわかる顔、を浮かべて、

「大丈夫。それより早く逃げてください…」（他のみんなはここには

いない、せめてなのむかやんだけでも…ー。」

「……（あれか…いい感じ…！？）」

なのはせつめの意図を語ってしまった。

魔女はつきよにどごめを刺そうと、泥の槍を生み出す。それでもつきよは動じない。

「早くつ！逃げてえつ！！」

「いやだ、そんなの…つきよちやんが」「で死ぬなんて、嫌だ！」

「（…自分の信じる道を、遠慮せずに進んでください。マスター）『（レイジング・ハート…）』」

刹那の会話を経て、なのはから迷いが消えた。

こう言つたのはは、つきよの前に出て、襲つてくる泥の槍を見据える。対してつきよは意外な展開に驚いた。

「() みんなで叶へさせ、これからやつはなんども思わなかつたな… みんなも、
「() むさね」

無言でつまよの前に立ちはだかる。

「いや、逃げてください！」

「それまでないよ。つまようかん、ここで終わるつもりみたいだ
ったし」

「そ、それは……！」

嘘のつけないつきよに対し、思わず笑みが漏れる。ただしなのはは

「嫌あああああー——————つっ！……！」

：鋭い音。

魔女の攻撃は、なのはのシールドが全て受け止めていた。

「……なのは……さん？それは、一體……」

『いきます、マスター。バリエジヤケット・セットアッパ』

「…レイジングハート、セーヴィー・アーネーップ！！！」

変身したのはを、顔色を変えて見つめるつきよ。なのはは振り向かず、用の前の躊躇で二ノイジソブハーネを向ける。

『デイバイン・バスター』

「はい、おはようございます。お仕事始めですか？」

桜色の奔流が
魔女を飲み込んだ

勝負は一瞬でついた

「一撃で倒れた魔女　それに伴い　縄界もその姿を消した

つきよは呆然としていた。目の前の少女が、先ほどまでのなのはとは別人に見えていた。そして、彼女の頭にはとある結論も出てくる。なのはは自分を助けてくれた。だからこそ、自分の出した結論を信じたくなかつた。

「今まで黙つてて、ごめんね」

向き直り、つきよをしつかり見て話す。今話すべきことは、もう全
部話してしまつたがいいからな。

「わたし、高町なのは。時空管理局の魔導師なの」

#7 「躊躇」（前書き）

書く事ない。

ところで、もしかして気づいてるかもしませんが：
つきよのキャラは、まどマギの魔法少女達のほぼ全員の集合体のよ
うな感じですね。意図した事ですがね。
とりあえずPSAで新しい設定が出ても、最悪スルーことじで

「…というわけなんです」

「なるほどね…。流石に死んじゃうよりはずつとよかつたけどね」
同日の夜。リンディ達は出払っているため、フェイト宅に来ていた
エイミィ（リンディの補佐）に報告しておいた。

この場に居るのはなのは、フェイト、エイミィ、フェイトの使い魔
のアルフだけである。

「早速リンディ艦長に報告を…とその前に、つきよちゃんの人柄に
ついてもう少し詳しく話してくれる？」

二人の少女が話し始める。彼女と出会ってから十数日の間、起きた
ことや感じたこと。

誰とでも友達になれるなのはと、友達ができる間もないフェイト。
それぞれほんの少し違うイメージを抱いていたが、決して大きく食
い違っていることは無かった。そして二人とも、最初に話しかけた
アリサがこの場に居ないことを少々残念にも思っていた。

「…大人しく引っ込み思案。昔は自尊心に欠けていたけど、魔法少
女になつてから自身を誇りに思うようになり、正義感も持ち合わせ
ている…か。私は、正直…ポルート式魔導師には一番なつちやいけ
ないタイプだと思つんだ」

「え…？」

フェイトとアルフが少し驚くが、なのはは表情を変えない。ジュエルシード事件の時に、何人か魔法少女を見ていたからだ。ちなみにポルート式というのは、インキュベーターとの契約によって行使できる魔法の事で、主に管理局やミジドチルダなどで使われる呼び名である。

「ほら、その子って”魔法少女”というのに対して、憧れ…みたいなのを抱いてるんだよね？でも実際にはあんな感じ。それを知った時…やっぱりそういう子ほど絶望しやすいと思う」

魔法少女は絶望した時、魔女となつて呪いを振りまく。裏を返せば、全ての魔女は魔法少女のなれの果て。

幼い少女が憧れる、テレビの中の魔法少女像。信じていたそれに裏切られた苦しみは、彼女たちには重すぎるのだ。

「後、これは艦長から聞いた話なんだけど…長く生き残る魔法少女つてさ、魔女からグリーフシードを集めることを生き残る手段だと割り切れる子なんだって。そのためには使い魔を放置して成長するまで待つなんてことも厭わないよ…」

「ちょっと待つてよ！使い魔が成長するってどういうことだい！」
「ああ、アルフもフェイトちゃんも知らなかつたつけ…。魔女の使い魔も人を襲い、命を喰らう。たくさんの人間を狩つた使い魔は、成長して親と同じ魔女になる。当然グリーフシードも孕むよ」

「だから、使い魔に人を襲わせて…グリーフシードを持つ魔女に成長させてからやつづけて、確実に得るものを得る…」

「そう。それができる人ほどグリーフシードのストックが多いから、長く生きられる。逆に、正義感が強いとこんな集め方はできないはず。聞いた限りだと、つきよみちゃんには無理だと思つよ」

「そんな…」

これが、魔法少女の現実。

幼い少女の憧れる魔法少女像と、そのマスコットキャラのような外見で彼女たちに契約を持ちかける。そしてそれに誘われるような純粋な少女ほど、この世界では脱落しやすい。それこそがインキュベ

ーターの狙いであり、そもそも魔法少女の魔女化が目的である彼らにとっては、少女には絶望してもらわなければ困るのだ。

「…とりあえず、報告しどくね

エイミーの一言でも、重苦しい雰囲気が和らがない。

「つきよちゃん…、わたしたちのこと、疑っちゃうよね…」

弱音を吐くなのは、いつもの彼女からはかけ離れた様子に、エイミーも慌てる。

「だ、大丈夫だと思うよ? だって、友達なんでしょう?」

「…」

つきよは、友達なのだ。

友達。

「(…友達だから、いつかきっと信じてくれる…)

55

次の日。

「つきよちゃん、おはよう

「…おはよう、了起来ます…」

「…」

会話がすこしとも弾まない。

授業中ふとつきよの方を見ると、目をそらす。

「…最近なのは達と一緒に昼食を食べていたが、今日は一人だった。

「（やつぱい。つきよちゃん、わたしたちのことを避けてる…）」

なのはは昼休み、途方に暮れていた。

「なのはちゃん…」

心配なのか、アリサとすずかが話しかけてきた。

彼女たちにまは昨日の事は話してあるため、なのはの悩みを知っている。

「つきよとはまだ話していないの？」

「うん、朝のあこせつだけなの」

「そんなのっ…」

言いかけて、アリサは思ひとどまる。

少なくともつきよは管理局を敵だと思つていて。それを知りながら、正体を知られやるを得なかつたなのはの気持ちを察したのだ。なのはには、つきよに話しかけることは辛いだらう。

「（…じやあ、あたしがやるべき事は…）」

少しの沈黙ののち、アリサが口を開いた。

「全くなのはらじくもない。いいわ、このあたしに任せなさい…」

「ふえ！？」

自信たつぱりに胸を張るアリサを見て、なのはとすずかは戸惑う。アリサは、なのはの歯みをひとも簡単なことのよつに呑いつのだ。しかし…

「（アリサちゃんなら、もしかして…）」

席へと戻るアリサ。

なのはには、その背中がとても大きく、頬もしく映つていた。

放課後。生徒たちの帰る時間だ。

家族の待つ家に帰らうとするその流れに、アリサは真っ向から逆らっていた。

「（お、いたいた。それにしてもありがちなシチュエーションね…）

「アリサが真っ先に向かつた場所…屋上で、つきよはせんやりしていった。

「おーいつきよー、何しみつたれてんのー！」

「…何でもないです」

隣に立つアリサだったが、つきよは振り向かない。ただただ幽霊のような雰囲気で空を眺めていた。

「何でもない？その雰囲気はウソをついている雰囲気ね」

「…アリサンには、関係ありません」

「ちょ、関係ないって何よ！？」

「…」

一向に話を聞くことしないつきよ。

「…ビーセ、なのはが管理局の魔導師って分かってショックだったんでしょ？」

「…？」

この時、初めてつきよが振り向いた。

実際は正式に局に所属している訳ではないが、つきよにとっては同じだろう。

「知つてたんですか…？」

「最近、協力者だつて聞いただけだけね。ちなみにフェイトも、はやての家族も管理局に協力してる魔導師」

つきよは口をぽかんと開けた。

彼女にしてみれば、最初は友達であり守る対象だったなのは。それが実は、自分よりよほど強い魔法使い。しかも立場的には自分の敵なのだ。おまけにアリサの言う事が正しければ、フェイトもなのはと同じ。

つきよのイメージでは、管理局の魔導師というとステータスに身を包ん

だ大人だつたため、こんなことは全く予想できていなかつた。

友達の何人かが管理局の人間。ということは…

「…アリサさんは？」

「あたし?違うわよ!協力者でも魔導師でもないっての」思わず息をつく。

しかし、心のどこかでは…ホツとしてしまった自分に気がつく。

「…つきよ、あたしたちつて友達でしょ?」

「はい…」

決まつてゐる。初めてまともに話した相手なのだ。

つきよがこう思う事を予想してか、アリサは迫る。

「じゃあ…なのはもフェイトも友達じゃない」

「…」

分かつてゐたはずだつた。
いや、分かつてゐるはずだつた。

例え管理局でも、なのは達は友達だ。大体、あの時…泥の魔女から守つてくれたじやないか。何故意識できていなかつたんだろう。

謝らなきや。でも…

つきよの心の変化を知つてか知らずか、アリサが更に畳みかける。
「結局、気まずくて話しかけられないだけじやないの?」

この一言で、何かが背筋を走り抜けた。
見透かされている。

自分でも気付いていないことを、第三者であるアリサの目はしつかり捉えていた。

「言つとくけど、なのはだつて気まずい。だからまともに話せないんだと思う。なら、意地張つてないでこっちから話しかけたつていんじゃない?」

「…でも、あの子がそれを知つたらどうなるつて思うと…」

「なるほどね…」

魔法少女といふことがばれた際、つきよは簡単に自身の境遇を語っていたが、その時の口ぶりだとつきよはキュウべえの事を信頼しているみたいだ。だからこそ、魔法少女と敵対しているらしい管理局の人との接し方が分からぬのだ。

「…とりあえず、まずは仲直りでしょ。それから目的でも何でも聞けばいいと思つ」

「…」

こんな感じで話し込むこと、なんと数時間。いつの間にか空は赤くなっている。

「落ち着いた？」

「はい…」

夕焼けは人を振りかえらせるといふ。既につきよの意地は時の流れによつて融かされ、夕日の光の中でこれまでの事を思い返す余裕があつた。そして、同じく夕日を浴びてゐるアリサ。天涯孤独だつたつきよにとつて、今のアリサの印象は…母親にも通じるものがあつた。

そもそも、この学校に来て初めてまともに話せたのが彼女なのだ。勿論なのは達也友達だが、その中でも特に大切なのがアリサだつた。そのアリサに、今こうやって説教され、慰められていたのである。

「まあ、一晩寝てから謝つてもいいと思うけどね」

いつの間にか座つていた二人。このままこうしていたいという思いが場を支配する。

しかし、暗くなつていいく黄昏空と寒さを増していく空氣は、一人の少女に帰れと言つてゐるようだつた。

「…そろそろ帰ろうよ」

「はい。あの…」

つきよが何かを言ひたそだという事が分かつた時…アリサは、前

方から妙な体重をと温もりを感じた。

一瞬、時が止まる。

「…………つー？ー？ー？」

「本当に、本当に… ありがと「ひざますつーーー！」

自分にかかる重さの正体… それに気付いた時には、つきよは既に手を放していた。

帰っていくつきよを見つめるアリサが、今度は冷静さを失っていた。

「な、ななななな… つーーーー！」

結局その日の夜、アリサは一睡もできなかつたとか…

#8 「友情」（前書き）

さてアリサとのフラグは立った。と思ひ。文才ないけど。
全くつきよはお人よしだなあ。

冷静に考えると管理局仕事しなぞ過ぎだなおいwww

#8 「友情」

#8 「友情」

「お、おはよー！」

「おはよーいぞーます…」

次の日の朝。そこにあつたのは、昨日と大して変わらない雰囲気。どうも会話がはずみそうもない、気まずい感じ。だが、今日はこの暗い雰囲気も長くは続かない。

「な、なのはさん」

つきよが、会話を繋げるべく口を開く。

「…あの時は、助けてくれてありがとーいぞこましたっ！」

「ふえ！？」

度肝を抜かれるのは、彼女にしてみれば、”あの時”から後の初めての意味のある会話がまさかお礼だとは思わなかつたのだ。

「それと…、昨日はごめんなさい。どうしても話しかけ辛くて…」

「あ、えーと…うん、わたしも躊躇つちゃつてごめんね」

続けて出てきた謝罪の言葉。つられるよつて、なのはも謝つてしまふ。いや、なのはの方も話しかけられなかつたことを後悔しているのだから、謝ることは彼女にとつて正しい判断であり、決しておかしい事ではないのだ。

それよりも、自分より人に話しかけるのが苦手な印象を受けるつきよに口火を切るチャンスを奪われてしまつた事を疑問に思つていた。昨日つきよに何かあつたのか？…そんなことを考えた矢先、昨日、

ある人物から聞いた言葉を思い出した。

全くのはらしくもない。いいわ、このあたしに任せなさい！

全てに納得がいつてしまつた。

「（ふええ…アリサちゃんには敵わないな…）」「

フェイトやアリサ達も会話に加わり、いつもの中の雰囲気が戻つてくる。
「フェイトさんも近接戦闘が得意なんですねー」

「あ、うん。バル…武器に頼つてるけどね」

「なのはちゃんはどうかゆうと砲撃の方が得意やろ？わたしは…」

今は戦えへんし、そもそも一対一は多分苦手や

「あーもう、あたしたちも一緒に戦つてみたいーっ！」

「ちょ、アリサちゃん！？わたしも？ねえ、わたしもなの！？！」

…若干話題に問題がある気がするが、それは決して敵対勢力同士の会話ではなく、確かに友達同士の会話だつた。

いつの間にか、その場にいた全員がこんなことを思い始めていた。

「（いんな日々が続いたらいいな…）」

そして、放課後。

今日ははやでとつきよ、そしてアリサが一緒に戻つた。

…正確には、未だに車椅子での生活をしているためにはやてを迎えた。新たにヴォルケンリッターのシャマルも一緒に戻つた。

夕日が照らす中、穏やかな会話が繰り広げられる。

「…え、つきよちゃんは料理できないんですか？」

「はい、そういう事はどうも苦手で…」

「一人暮らしなのにそんなんはあかん、栄養が偏つてしまつーほなら

今度うちに来てや、何か御馳走するで

「じゃあ今度あたしにも料理教えてよー」

こんな、他愛のない会話が続いていた。

しかし話題が忽ちきると、こんな話をすると云ふ。

「…そういうえば、シャマルさんも管理局で働いていらっしゃっているんでしたね」

ほんの少し、空気が重くなつたような気がした。

「ええ、その…、やつぱり管理局員つて好きになれないかしら?」

「そんなことありま…確かにちょっと前まではそうだったかもしないです。でもなのはさん達もシャマルさんも優しいし、何だか今では、管理局が悪者だなんて思えません

元々”たとえ管理局員でも友達は友達”という考え方をしていたつきよだが、初対面であるはずのシャマルも優しい人だつたからこそ今のような言葉が出たのだ。

何だかんだで、つきよも結構なお人好しなのだ。

「あら?でもシグナムも、ヴィータもザフィーラも、つきよちゃんに」とつてはちょっと怖いかもしれませんよ?」

「こりゃシャマルっ! (ペッシュ)」

「あ、あはは…」

「…」で空気は軽さを取り戻した…かのよひに見えた。

「…管理局は、どうしてキュウベえや魔法少女を狙つているんですか?」

一気に表情を変えるはやて達。

「(やつぱりその質問…)」

少しの沈黙。

「…我々管理局が魔法少女システムに入れる目的、ですね」

「はい。どうしても貴女たちは魔女を倒す邪魔をしてるようじて…」

何も知らない魔法少女からすれば、この反応は仕方ないことだらう。はやてとシャマルは思念通話で相談を試みるが、

「（今言つてええんやろか…）」

「（…ここまで関わったんです。少しずつ、話していくば）」

「（あのー、申し訳ないんですが簡抜けです）」

どうやら思惑は外れたようだ。

「えつ！？」

普通の人間には聞こえない会話方法である思念通話。ミッドチルダやベルカ式の魔導師の間で使われる会話方法である以上安心していたのだが、魔法少女であるつきよにはばっちり聞こえてしまつようだ。

実はジュエルシード事件の際、魔法少女だったなのはとミッド式魔導師だったフェイトはきちんと念話が成功していたが、そのことをはやってもシャマルも聞いていなかつたのである。

「（念話いいなー…、何話してたんだろ）」

もちろん、一般人であるアリサには聞こえていなかつたが。

「今話せることだけでもいいんです、どうか教えてください！」

つきよの真剣な眼差しに、意を決してシャマルが話す。

「…管理局による介入の目的は、魔法少女をインキュベーターから救済すること」

「救済つて…それに、インキュベーターというのは？」

「実は…」

言いかけた矢先、”いつもの感覚”に襲われた。

「これは…魔女結界！」

近くにある。すぐ近くに潜んでいる魔女がいるのだ。

「ちょっと退治してきます！」

反応のあつた方向に駆けつけるつきよだが、

「なら私も行きます。攻撃は苦手ですが、力にはなれるはずです」「あ、ありがとうございます」

「じゃああたしはなのは、はやはフエイトに連絡するよー。」

「うんっ！」

結局総力戦となってしまったようだった。

-Gabrielle-

橋の魔女。その性質は嫉妬。
失恋の絶望に支配された魔女。

カッブルを見るだけでイラつき、落ち着いてもすぐに使い魔に煽られてしまう。

他人の恋を引き裂かずにはいられないが、独り身の人間は決して襲わない。

「くっ、近づけない！」

暗く不気味な魔女の結界で、黄金の光が舞う。フエイトだ。

「こっちの砲撃も防がれちゃうー！」

やや離れた位置では、なのはが文句を言っていた。

現在はなのは、フエイト、なのは、シャマルの四人が魔女と交戦しているが、いまいち決定打を与えていない。

緑色に光る使い魔が執拗に邪魔をするうえ、魔女自身も衝撃波のようなものを放つために、近づくことすらままならないのだ。

「うああっ！」

つきよが飛ばされる。使い魔の体当たりを受けたのだ。すぐにシャマルに回復してもらうが、不利な状況は変わらない。

「（この魔女、強い……！みんながいてくれなきや、とつてた負けてたかな……）」

そう、今回の魔女はつきよが過去に相対したどの魔女よりも強い。一人で戦える相手では決してなかつた。

「つきよちゃん大丈夫！？」

「な、なんとか！」

なのはとフェイトも、無防備となつたつきよたちの所に来る。余裕はなさそうだった。

見かねたのか、シャマルが口を開いた。

「……つきよちゃん、あの使い魔を止められますか？」

「はい？」

「作戦があります」

シャマルが自信ありげに言う。彼女は戦闘に積極的に参加することは苦手だが、その分回復や補助などのサポート能力に秀でており、戦況の判断も得意である。

彼女の作戦はこうだつた。まず、クロスレンジ（近接戦闘）が得意で防御力もそこそこあるつきよが使い魔の動きを止め、砲撃の得意ななのはの攻撃により最低でも明確な隙を作り、瞬発力に優れたフェイトが止めをさす。

三人の少女は作戦の内容を理解すると、すぐさま動く。

「いきます、ジエミニブレイズッ！」

つきよの声とともに、彼女の両手に炎が灯る。使い魔はそれに気づいて突進してきた。ここまでは、さつきと同じ。

襲いかかる使い魔を、いなすのではなく……受け止める。時間を稼ぎ、隙を作るために。

「捕らえましたっ……！」

「おつけー、いくよレイジングハート－カートリッジロードー！」

『了解です、ロード・カートリッジ』

つきよの合図になのはが応え、愛用のデバイスを構える。

なのはの指示を受けたレイジングハートは、魔法の杖らしからぬ機

械音を上げ、巨大な薬莢のようなものを吐き出す。

：闇の書事件当時、敵対していたヴォルケンリッターとの力の差を思い知られたレイジングハートは、管理局に自らの強化を依頼していた。

古代ベルカ発祥の、魔力の詰まったカートリッジを消費することで瞬間的な攻撃力を得る『カートリッジシステム』の搭載。これを経て、『レイジングハート・エクセリオン』として進化を遂げたのである。

『デイベイン・バスター』

大威力砲撃は使用者への負担も大きく、撃てるチャンスは限られている。しかし今はつきよがしつかり使い魔を止めていたため、なのは砲撃に集中できていた。

「ディバイイイイー——ン、バスターアアア——ツ——！」

桜色の光が、暗き魔女結界に満ちる。カートリッジシステムを使って発射されたバスターは、かつてのジュエルシード事件の時代とは比べ物にならないほどの威力を誇っている。

魔女も素早く反応して衝撃のバリアを張つたが、爆発的なエネルギーはいともたやすくバリアを押し流し、魔女を飲み込む。

「フェイトちゃんっ！」

「……大丈夫、準備はできてるよ」

『当然です』

チャンスを待つていたフェイトとそのデバイスのバルディッシュが応答し、魔女を向く。

鎌状のハーケンフォームとなつたバルディッシュが薬莢を吐き出す。『彼』もまた、闇の書事件の時に自らを強化、カートリッジシステムを積んで『バルディッシュ・アサルト』として生まれ変わつていた。

『ハーケン・スラッシュ』

音声とともに、バルディッシュに黄金の刃が宿る。

「……きます！」

飛び出すフェイト。スピードに秀でた彼女がしっかりと目標を捉えて突き進む様は、さながら弾丸のようだつた。フェイトが近づいてきた頃、魔女を飲み込む光が途絶えた。なのはが砲撃を終えたのだ。輝く鎌を振りかぶるフェイト。魔女は未だに死んでいなかつたが、今は砲撃を受け切つた直後。完全に無防備だ。

「やああつ！――」

光の刃が振り下ろされた。

魔女が最期の瞬間に見た、一人の魔導師。

その眼には、憎しみではなく、哀れみと慈愛の色があつた……。

「一件落着だね」

「やつぱり魔導師の皆さん凄いです……、私あんまり役に立つていなかつたような気が……」

「あの、私なんかそもそも指示だけで戦闘不参加でしたが」戦闘が終わり、気の抜けた会話をする一同。このまま一日が終わるうとしていた……

しかし、運命はそれを許さない。

「ところで、さつき聞いた……管理局の目的について……」

それは、つきよにとつては友達と和解するための道しるべのようなものだつたのだろう。なのは達もそれが分かつていて、だからこそ、もう黙秘するわけにはいかない。

でもこれを話してしまつたら、つきよはどうなるか。最悪……

「え、えと……、それは、すゞーく言いにくいことなの……少しづつ話すね」

#9 「疑惑」（前書き）

分かった。

文才がない、というより詩的表現が苦手なんだ。
伏線は気をつけてるつもりだし。

とりあえずそんなこと気にせず、

純粹に物語だけ楽しんでいただければと。

あ、まどか組の出演はもうちょっと待ってねー

#9 「疑惑」

次元空間のどこか。

そこには惑星は存在していない。にも関わらず、多くの船が出入りしていた。

そもそもこれは惑星ではなく、超巨大な宇宙ステーション。数多の次元世界から、様々な目的で多くの人が訪れてくる。ここに来るような人物には、民間人、ましてや違法取引などを目的としたならず者などは殆どいない。その多くが政府の高官や高名な学者、管理局の職員等である。

ここは多くの次元世界の中心。時空管理局本局なのだ。

「どう? 何かわかった?」

「駄目です、当該エリアにもそれらしい手掛けかりが見つからず……」
本局のある観測部屋にて、リンディやクロノ、彼らの部下達がせわしなく動いている。

「やつと予算が下りたのはいいのですが……やはりそう簡単にはいきませんね」

クロノが声を上げる。彼はリンディの息子だったが、同時に彼女の部下もある。公私混同はしない、それがクロノの主義だった。

「ええ、でも解決できるなら早いうちにしてしまわないといけないわ。なのはさんの友達も巻き込まれてしまっているみたいだし…」

「…つきよですね。彼女の素質は恐らく平均的。でも性格面で危険度が高い…本当は優先的に保護するべき人物ですから」

「しかし…奴に地球での管理局員の存在を知られている以上、手を出そうにも出せないよね」

彼らが話している事の中には、今のなのはたちに関係していることを示唆する事項が含まれている。

「少なくとも、次元空間全域からしらみつぶしに探さなければいけない…っていう状況はさっさと脱出してしまいたいわ」

落ち着いた口調で話す彼らだが、部下達の中にはその顔に焦りの色を感じたものも多い。

事実、彼らは焦っていた。

「（早く見つけなければいけないというのに…インキュベーターの本拠地を）」

つい最近まで管理局は闇の書事件の事後処理に入手と予算がある程度割かれていたが、これが終わつた矢先に地球で魔法少女が発見されたことが上層部を刺激したのか、特別に『インキュベーター追跡』の予算が下り、組織が再構成された。

実はこれは並大抵のことでは起こらない異常事態。というのも、管理局は昔から魔法少女関連の捜査には比較的消極的だつたからだ。最大の要因は、手掛かりを得ることが極度に難しいことである。

インキュベーターはレーダーによるサーチが不可能、魔女も結界に身を隠しているため魔法少女以外にはほぼ探知できない。残る要素である魔法少女の魔法（管理局はポルート式魔法と呼ぶ）も、ある程度の性能を持つ観測装置が必要である上に、それを使っても魔法を使っている瞬間でないと決して反応しない。しかも魔法少女が

魔法を使う場所は大抵が魔女結界の中。そのため、現行の管理局の技術では全くと言っていいほど把握できないのだ。

地球でのポルート式の存在が確認されたのも、ジュエルシードが地球上に流れ着いたこと、それによる次元震のためにアースラが地球上に訪れたこと、そして現地の魔法少女が結界の外で魔法を行使したこと、これら偶然の重なりによる快挙だったのだ。

ちなみにその時結界外で魔法を使っていた魔法少女こそ、後にミッドチルダ式魔導師となつた高町なのは本人である。

リンディがふと人の気配を感じた…すぐ後、扉が開き一人の人物が入つてくる。

「…定時報告します。成果は…無し」

「こつちも何も得られなかつた、やっぱこんなことに興味のある奴なんていねーよな…」

勤務中のシグナムとヴィータだった。彼女たちは、なのはのように元魔法少女だつた人物からの聞き込みを担当している。

魔法少女になるような大きな因果を背負つた者には、良質なリンカーコアを持つた者も多い。そうでなくともソウルジエムを体内に戻す手術を経ると副作用で高確率でリンカーコアが生成するため、管理局に保護された元魔法少女はその多くが管理局員となつている。シグナム達はそのような人物からの聞き込みを行つていたのだ。

「そう…ごめんなさいね、望みの薄いことをやらせてしまつて」「いえ、お構いなく。これも償いですから」

彼女たちヴォルケンリッターは、闇の書事件の主犯格と言つてもいい存在だった。彼女たちはある時は使命から、あるときは誤解から人を襲い、そのたびにリンカー コアを奪い続け、闇の書を覚醒させてきた。かつて敵だつたなのは達や最後の主であるはやてのおかげで罪を重ねる運命からは解き放たれたものの、代わりに彼女たちに宿つたものは…黒く深い自責の念だつた。だからこそ、四人は償い

の為に管理局で働いているのだ。

「こちらも成果は期待できない。今最も希望があるのは… やっぱり、
ユーノが担当しているところだね」

クロノが呟く。ユーノ・スクライア― かつてなのはにトバイス
を与え魔導師としての道を示した人物。彼もまた管理局で働いてお
り、闇の書事件の際にも活躍した。

彼の担当する場所は、本局某所に存在する『無限書庫』。膨大な蔵
書量を誇る管理局の書庫で、次元世界におけるあらゆる秘密がここ
にあるとさえ言われている。しかし、蔵書量があまりにも多すぎる
ために必要な情報を得ることは難しい。管理局がこの書庫を利用す
る際は、特別な組織を編成して年単位で調べることさえもあるとい
う。

ユーノは非常に優秀な検索魔術の使い手であり、闇の書事件の際に
はその特技を発揮し、局の職員を驚かせていた。なので今回も無限
書庫の検索要因に抜擢されていたのだ。

「やはりそこしか…、夜天の魔導書についても書かれていたという
無限書庫しかない…のか」

「でも、流石にこんな短期間では見つかりっこないわよね。闇の書
事件の時も、もしかしたら運が良かつただけかも…」

その場に少しずつ悪い空気が漂い始める。ここに居る全員が、今す
ぐにでもうなだれそうな顔つきさえしている。
あまりにも、成果が無さ過ぎるので。

「…いけないわ、気を落としちゃ。今は一刻も早く突き止めるため
に…やるべきことをやらなこと」

つきよはただただ呆然と、手にしたソウルジエムを見つめている。

契約をしたときに得た、魔法少女たる証。つきよにとつて最初は…
否、今までずっと、それは正義の味方たる誇りの象徴だった。
それの意味が、変わっていた。

「これが…私の魂…、この体は、ただの抜け殻…？」

「…魔法少女について今話せることは、とりあえずこれだけなの」
言いたくなかった悲しい事実。しかし、より重要で…危険度の高い
内容はまだ伏せていて。

今のつきよの反応で皆は予感していたのだ。…今話せば、最悪の結
末が待っているかも知れない。

「…嘘、ですよね？ 本當なら…私…、ゾンビみたいなものじゃない
ですか…」

「嘘なんかじゃあらへん。…本當は言いたくなかったんや、でも…」
嘘だと思ったかった。これが、管理局が魔法少女を欺くための嘘で
あつてほしかつた。いや、そうに決まつてゐる。そもそも管理局は魔
法少女の敵じやなかつたか。それに…

「キュウベえは、そんなこと一言も…っ！」

つきよにとつてインキュベーターは恩人だった。自分を変えてくれ
た、魔法の世界の使者。魔女から人々を守るために魔法少女を生ん
で、その報酬として願いさえ叶えてくれた…

魔法少女として戦つてきた日々の中で、つきよの中でキュウベえは
大きな存在になつていたのだ。

「彼は嘘は決してつかないと聞きます。しかし、最低限の事しか話
さないらしいですよ」

つきよはこれを聞いて、ある考えに至つた。

「（嘘はつかない…というのが本當なら、聞けば答えてくれるはず）

「彼女はキュウベえを信じたいのだ。そもそもなければ、今まで信じてい

たものが崩れてしまうかも知れない。

最早、ここに居る面々の誰もがそれを分かつていて。しかし…もう
これ以上つきよを苦しめたくない。いたたまれなくなつたアリサが

話しかける。

「つきよ、今はまだ言えないけど…魔法少女にはまだ秘密があるの。

管理局が魔法少女を減らしたい理由がね」

駄目を浴びたアリサは、つきよを見据えて話し続ける。

「…フロイトの家は管理局の出張所になつてゐる。今からでも遅くはないから、そこに行きなさいよ。そうすれば…魔法少女を辞められるから」

つきよはこの時、管理局の…少なくとも、表向きの田的に初めて気が付いた。

仮にこのことが本当なら、自分はキュウべえに騙されていることになる。しかもアリサが言ひにこな、他にも都合の悪い秘密があるらしい。

アリサ達は、初めてできた友達だ。管理局のなのはだつて自分を守つてくれた。しかも、今の彼女たちの真剣な眼差し。ビックに嘘をついている要素があるうか。

でも…嫌だった。今まで信頼していたキュウべえと敵対するようになることが、たまらなく、嫌だった。

「…少し、考えさせてください。明日の放課後、フロイトさんの家に行きます」

これが、今つきよのできる精いっぱいの答え。

「今晚ゆっくりキュウべえと話し合つてみます。それで駄目なら…、どうかよろしくお願ひします」

つきよは、インキュベーターとの会話によって判断するつもりなのだ。

もしこれが管理局の嘘だったら、魔法少女として…はつきよと管理局に敵対する。なのは達と戦う事を覚悟で。

もし管理局が本当に、自分がキュウベえに騙されていたといつならば、

その時は…決別する。

過去の自分に…キュウベえに頼つていた自分に別れを告げる。

なのは達には…つきよの瞳から、確固たるその意志を感じられた。そして、自分たちが彼女の為にやるべきことを感じたのだ。それは、つきよの判断を認めてあげること。

「…分かった。絶対、絶対来てねっ！！」

彼女たちは、つきよを信じていた。きっと、インキュベーターに別れを告げて…魔法少女を引退してくれると。納得のいく答えを出し、『魔法少女』と決別してくれることを。

しかしこの時、アリサはインキュベーターとの初対面…フュイト宅での会話を思い出していた。

そして、小ちな疑念がわく。

「（…つきよは、キュウベえの…あの冷めた言い方、態度、考え方…に…耐えられるの？）」

「キュウベえ、出てきてください…」

誰もいない家の中、つきよは虚空に呟く。

「やれやれ、一体なんなんだい？随分『不機嫌』そうじやないか」「叫びを聞き届けたのか、どこからともなく現れる白い影。

・魔法少女がキュウベえを呼べば、いつでも駆けつける。主に、ソウルジエムの穢れを吸ったグリーフシードを処理するためだ。しかし、今回つきよが呼んだ理由は、当然別にある。

「ソウルジエムが私の魂の入れ物って…本当ですか？」

恐る恐る尋ねる。

例えこれが本当だったとしても…納得のいく説明さえしてくれれば、つきよは満足だった。

しかし、キュウベえの答えは予想外のものだった。

「…それは、なのは達に聞いたことかい？」

「…？」

向こうが知っている思つていなかつた人物の名前を出され、呆気にとられる。

「なぜ、なのはさん達のことを…」

「そりゃあ彼女たちが元魔法少女だからわ。管理局に契約を破棄されたけどね」

「えつ…」

続けざまに放たれた一言に、更に驚きを隠せなくなる。なのは達も、元魔法少女…？

でも、もしそうだとしたら納得がいく。魔法少女の真実を身をもつて知つている彼女たちが、友達が魔法少女でいることを止めさせようとしているのは、本当に…私が心配だつたからなんだ。

ということは…

「…全部、本当なんですね」

「ああ、そうさ。ソウルジエム…魂の宝石っていう意味だろ？？」

全く悪びれずに説明するキュウベえ。

いつの間にか、つきよの目にうつすらと涙が浮かんでいた。

「何で…何で全部知つて黙つてたんですか…つ！？」

これは、つきよの心の叫びだった。

今会話でキュウベえへの信頼にひびが入ったつきよ。この時のダメージは、つきよにとつてはあまりにも大きかった。
それでも、やっぱり…納得のいく説明をしてほしい。
それだけだった。

すぐに、インキュベーターが口を開く。

彼にとって至極当然の口上。それでいて、多くの魔法少女たちを絶望へ落としてきた言葉。

「聞かれなかつたからに決まつてゐるぢやないか」

#1-0 「絶壁」（前書き）

ちょっと時間がかかってしまった。

何だかフェイトの出番が少ないですね。これを書いている最中に気づいた。

これは対策を考えなければ。
後、今回若干尺が長いです。

展開については何も言わないで。

#110 「绝望」

#110 「绝望」

「か弱い人間の体のままで戦えなんて言わないよ。だからこうして魂を固体化している」

「ソウルジムさえ無事なら、例え頭や心臓をすりつぶされても体を再構築できるんだ」

「うへこり」とがもし都合の悪いことだといふのなら、事前に聞いておくべきだったね」

「そもそも、どうして君たち人間は魂の在りかにこだわるんだい？ わけがわからないよ」

いつもと変わらない雰囲気の学校。もちろん、一般の生徒や教師たちにとっては、だが。

魔法少女を知る者たちにとって、今日は特別な日になるはずだった。
…少女たちの闘いは、ここで勝利を迎えるはずだった。

しかし、そのサインがいつまでたつても現れない。

一時間目が始まても、
昼食の時間になつても、
授業が全部終わつても、

つきよは、学校には来なかつた。

「…やっぱり、これじゃあだめなんだ」

放課後、アリサが口を開く。

「分かつてたはずなのに…！あいつのムカつく言い方じやあ、つきよが余計に傷つくつて…」

「あ…！…！」

なのは達の顔つきが少し変わり、沈黙が場を支配する。

何故気付かなかつたのか。こんな空気が流れ始める。

少女達は結果を急ぐあまり、前が見えなくなつていた。

アリサは、誰よりもつきよのことを気にかけていた。だからこそ、誰よりも先に気付くことができたのだ。

…なのは達が魔法の事を聞いてから、彼女は劣等感を感じていた。なのは達が自分と別の世界に居ること、それが少し悔しかつた。そう思つていた矢先に転校してきたのが、つきよ。

彼女に最初に話しかけたことは、アリサの素であり、彼女にとつて当然のことだつた。特に意識しての事などでは決してなかつた。しかし…つきよはアリサ達に心を開き、友達となることができた。この時、アリサに自信が生まれていた。魔法が使えなくても、自分は誰かの役に立てるのだと。つきよの正体を知つた後でも、不思議と劣等感はなかつた。

彼女はつきよに感謝していた。誰よりも、つきよを守りたいと思つていたのだ。

「早く探しなあやー」

アリサの叫びによつて、一同が我に返る。やむべきひとを思い出したのだ。

「（そうだ、後悔している暇なんてない。手遅れになる前に、つきよちゃんを…助けなきやー）」

黄昏はその暗さを増していく。

「（アリサン…なのはさん…、ビニ…、いるんですか…？）」

暗いというのに、登校していなかつたつきよが出歩いている。

小学生が学校から帰るような時間はとうに過ぎている。当然聖？の制服を着た人影は見当たらない。

それどころか、目的に心当たりさえもなかつた。ただ漠然と歩きまわっていた。

それでも…逢わなければいけなかつた。

なのは達に会つて、キュウベえと決別しなければいけなかつた。

「（私は間違つていた。もっと早く、管理局…なのはさん達を信じておくべきだつたんだ…！…）」

つきよの心を支配する、黒い海のように深い後悔。

彼女は昨晚のキュウベえとの会話で、一気に彼への信頼を失つていった。人間の価値観がキュウベえに通用しないことを悟つたのだ。

そして、管理局の少女たちはこれを最初から知つていた。それで、あんなに…。

こう思つた彼女は、真っ先に行動に出た。…家を飛び出したのだ。これは闇雲な行動だつた。だけどつきよは信じていた。いつか、き

つと見つかると。

この時、つきよは確かに短慮だった。
もう少し冷静になつていれば…家から出ずに、電話などで伝えれば、
きっとすぐに会えていただろう。
しかし、もちろんこの行動だけでつきよを責めることは酷だらう。

彼女は…あまりにも、運が悪かった。

消えかかつた夕焼け。かなり暗くなつてきたが、既に街灯がつき始
めているため…前から来る人影に気づくことができた。

「（もしかして…！…）」

希望を抱き、かけよるつきよ。やつと見つかったのかと。
しかしよく見ると、人影の正体は知らない人だった。

「……」

中学生ほどの少女のようだ。ひどくやつれている風で、心なしかふ
らついているようにも見える。

…こういう人を放つておけないのが、つきよのいい所であり…危険
なところでもあった。

「あのっ、大丈夫ですか？」

つきよは声をかけ、肩を貸そうとする。

「……？」

虚ろな瞳で振り向く少女。つきよに目を奪われた少女は、思わず握
つていた手を開いてしまった。

少女の手の中には落ちる。…それは、つきよがよく知つ
ている大きな宝石。透き通つてはいるはずのそれはすっかり濁りきり、
元の色が何なのか全く分からなくなっていた。

「（ソウルジエム！）ということはこの人…。こんなに濁つて、早く

浄化しないこと…）「

焦るつきよ。急いで懐からグリーフシードを取り出し、少女のソウルジムに当てる。みるみる穢れを吸つていぐグリーフシード。しかし、ソウルジムの濁りは全く収まることが無かつた。

「え…っ？」

今まで無かつた事態に戸惑う。

グリーフシードが穢れを取れていない。これは今まで魔法少女生活を続けてきたつきよにとってはあまりにも想定外な事だつた。ソウルジムの中に残る、渦巻く黒い濁り。このままでは…。

「（このままじゃ…一体、どうなるの…）」

つきよは知らなかつた。今まで自身のソウルジムが濁らないように気をつけてはいたが、濁り過ぎるはどうなるか…考えていなかつたのだ。キュウベえも『濁らせなければいいんだから』としか言わなかつた。

しかし…淀み切つた宝石を皿の当たりにして、つきよは考へてしまつた。

「（ソウルジムが濁りきると…魔法少女は、私たちめぞりになるの？）」

つきよの心感いを感じたのか、生氣の宿つていない、絶望に染まつた目が、つきよを見る。

彼女は、かすれた声で呟いた。

「…上げ…て…」

刹那、黒い光が爆ぜ、激しい衝撃波がつきよを襲つ。

「な…っ！？」

禍々しい気が辺り一面にあふれ出していく。

嫌な感じがする。しかし、目の前の少女が一体どうなつているのか、

混乱の頂点に立っていたときには、分からなかつた。

必死で衝撃波から身を守るつぎよ、彼女は衝撃波の中心を見据え……

言葉を失つた。

そこへあつたのは、確かに今まで田の前に居た少女のソウルジム。

…四、クーリーハジー博士たるた

卷之三

それは、確かに今まで敵視して、狩ってきた存在だった。

それは、確かに今まで田の前に居た存在だった。

それは、確かに

それは、恐らく…

「嫌、嫌ああ」

井戸のいじょうであるつきよが、これからなるせんざいだった。

! . . . !

Clarisse

亀の魔女。その性質は諦観。

自らの孤独な運命に逆らえず、また耐えることもできなかつた魔女。自分では決して動こうとしないが、彼女の結界に迷い込んでしまつたものは、誰の意思も関係なく底なしの沼に沈んでいく。

『ウナギ』、『ウナギ』――――――――――――

月田が「さ」とおなじ女の名を呟く声
しかし いくつも こゝ

他のみんなは一人一組となって別の所を探している。自分もさうきまでなのはと一緒に居たが、分かれ道のために手分けして探すことになつた。

夜道の中、非戦闘員一人だけ。確かに怖かつた。変質者もだが、何より…魔女の存在が。しかし、そんなことを気にしていられる状況であるわけがない。

彼女の家に訪ねてから気が付いた、つきよの失踪。

これはなのは達全員に焦りをもたらしていた。フェイトモにいるHイ//イやアルフも捜索に協力しているほどである。

とりわけ、アリサは先ほどから嫌な予感がしていた。

”が、起じつてしまつたのではないかと…。

「（いや、そんなことあるわけない！）」

つきよのことだ、きっと屈た堪れなくなつてあたし達を探して、迷子にでもなつたんだ。

それでも思わなきや…壊れてしまつてやつだった。

「…つきよっ！」

アリサは意外なところでつきよを見つけた。諦めたら帰らひつと黙っていた場所…アリサの自宅の前である。

恐らく気を失つているのだなつ、つきよはアリサが近寄つても横たわつたまま起きない。

「（どうしたのよ…！強い魔女とでも戦つてたの？）

搖さぶりをかけても一向に目を覚まさない。

「（何とかしないと…！でもどうやって…とりあえず）」

何をすればいいのか分からぬアリサが最初に思いついたこと。それは、友達や管理局の知り合い全員に状況報告のメールを送る…。正直、何故こいつしたのかは分からなかつた。只、勘がそう告げていただけだつた。

この判断は、すぐに正解だと気づくことになる。

ぼんやりと開かれる、つきよの青い瞳。

しかし…転校初日に見た青く澄んだ泉は、心なしか淀んでいくように感じられる。

「…アリサ、さん…？」

「気がついたのね…魔女と戦つてたの？元気ないけど…」

心配そうにささやくアリサ。

数秒の沈黙ののち、つきよが口を開く。

「…アリサさんは、知つてたんですね…魔女って、一体何なの…か…」

「…………」

アリサは悟った。つきよが、魔法少女のたどる運命を知ってしまったことを。

「ちょっと、ソウルジエム見せてみなさいよつ……」

つきよのポケットから宝石を探し、手に取る。

ソウルジエムは、絶望の闇に染まっていた。

「つ……早く浄化しないと……」

慌てるアリサだが、つきよは落ち着いて答える。いや、諦めきつていた。

「…………めんなさい、わざ戦つてから……全然、グリーフシードが効かないんです……」

「そんな……それじゃつ……！」

グリーフシードが効かない。それは、魔法少女が絶望に呑まれかけていることを意味する。

自ら穢れを生み始めたソウルジエムは、グリーフシードで浄化できなくなるのだ。今のつきよは、本人が絶望を乗り越えなければすぐにでも魔女となってしまう状態だった。

あつてはならなかつた最悪の事態が、田と鼻の先に迫つてい。いつしか涙が浮かんでいた。

いや、自分で絶望してたまるか！まだ間に合つはずなんだ！

「諦めるなんて許さないからつ……肩貸すわ、だから立ちあがりなさいよ……」

自分を奮い立たせ、つきよを立たせる。

行先は当然、フェイトの家。そこまでたどり着きさえすれば……つきよは、魔法少女の運命から解放されるのだ。

「……私、正義の味方……の、つもりでした……。悪い魔女から、みんなを……守る、魔法少女……」

歩きだしてからすぐに、つきよが口を開く。

アリサは丁度現状の報告を終えたところだった。それを待つて、つきよは話を切り出したのだ。

「…それが、本当は、こんなもの。魔法少女が魔女になつて…、それを、やつつけるため…に、魔法少女が増える。笑っちゃいますよね…」

「つきよ…」

そこでアリサは初めて気付く。つきよもまた、涙を浮かべていることに。

「つきよは”魔法少女”に対して、夢を、希望を抱いていた。正義の味方。かつこいい、今までとは違う自分。きっと、何かがあつてそれが打ち砕かれたのだろう。

「（もしかして、魔法少女の最期を、田の当たりにしたのかも…）アリサがこのような結論に達したのも無理はない。

目を更に潤ませて、つきよは続ける。

「私つて、ほんと…バカですよね。こんなに、優しくしてくれる…友達の言つ事を…すぐには信じないで、管理局を…疑つてばっかりで」

「…つきよは悪くないわ。一応、キュウベえの方が付き合い長いんでしょ？簡単に裏切れなんて無理よ」

アリサは、まるで自分に言い聞かせるかのように言つ。この事が、自分達には今まで分かつていなかつたのかもしれない。自分たちにとって、キュウベえは敵でしかないのだから。

しばらく歩いて…

「…あぐうつ…？」

つきよが突然苦しみだした。

「だ、大丈夫！？」

慌ててアリサがソウルジエムを確認するが、変わらず…いや、先ほど以上に暗かつた。

「も、う…、限界、かなあ…」

「そんなん…まだ諦めないでよつ…！…もつすべ、もつすぐ助かるからあつ…」

泣きながらしきよことつべ。…「ひしないと、自分まで絶望に飲まれてしまいそうだつた。

「最後、まで…、うう、迷惑…ぱっかり…かけて、しま…ました、ね…」

激しく痙攣し、うずくまる。ソウルジムの闇が渦巻く。

「だから最後なんて言わないでおつ…！」

…いつの間にか、アリサは力強く抱きついていた。

流石に耳元で叫ばれたからか、下を向いていたつよがこちらを振り向く。苦しむ中に、どこか心配そうな表情で。

「…、逃げない…んですか？」

「逃げるわけないじやない…！…最後まで、つよの力になつてやるんだからあ…つ…！」

「…！」

「待つてて、今フロイトの家に電話するから…」

アリサは素早く携帯電話のキーを打つ。

打ち終わるより前に、つよが口を開いた。

「…えへへ…、もつと…早く…信じて…、れば…」

携帯電話の「ホールが鳴り始める。入力を終えたアリサが見たものは、つきよの、悲しい…悲しそうな微笑み。

「本当に……に……もつと……早……く……」

どこかで、何かが、弾ける。

「…………つきよ、大丈夫つ、大丈夫だから……！絶対……諦め

……アリサの叫びは、闇に吸いこまれていった。

- Magdalene -

ヤドリギの魔女。その性質は依存。

かつて夢見た幸せを追い、盲目的に人間を捕らえる。
何かを寄生させることによって使い魔を生かし、育て続けるという。
宿主となつた人間は生きて帰ることもあるようだが、その後どうな
るのかは誰にもわからない。

#11 「月夜」（前書き）

遅れて申し訳ない。

しかし最初に言つたとおり、本来は不定期更新です。
てなわけで、これからの中間テストラッシュ、
その後に控えているモンハン3Gにより
これからますます遅れる事になるかと…

#11 「月夜」

#11 「月夜」

…ヤドリギの魔女誕生から、ほんの少し時を遡る。

「え、それは本当…？」

本局のある部屋にて、リンディの驚いた声が響く。
「はい、確かに記されています！これなら、奴らの本拠地に攻め入
ることも…！」

リンディへの通信は、無限書庫で調査していたユーノからだつた。
彼は調査を開始してからわずか数日で、早くも目的の資料を見つけ
だしていた。

インキュベーターの概要。

遥か昔、古代ベルカ式が栄えていた時点で既に宇宙全域に広まつて
いたこと。

失われた魔法大国『アルハザード』があつたといわれる時代での報
告例。

ベルカ式、ミッド式魔法技術での契約解除手順。
そして…インキュベーターの本拠地。

大雑把な情報しか載つていなかつたが、それでも…彼らの拠点につ
いての情報が得られたことは大きい。

「……してはいられないわ。みんな、中央や地上本部に報告、並びに応援要請を！」

たちまち騒がしくなる観測部屋。

しかしその騒がしさが、一同に安堵と士気をもたらしていた。ようやく進展があった。後は本拠地を探し当て、情報を収集しつつ、可能ならば……呴く。もう一度と、魔法少女を生まないよつこ。喧騒に包まれる中、一本の通信がリンクティに来る。

「何かしら……え、エイミィ？」

地球のフェイト宅にて、ひとりの魔法少女の監視にあたっている補佐のエイミィ。彼女の報告は……

「……何ですって、つきよさんが……失踪！？」

「（一体、どこにいるの……つきよけちゃん、アリサちゃん……）」

月明かりの下、路地を走るのは。

アリサからのメールを受け取った一同は、彼女の示した場所を中心につきよ達を探しまわっていた。

「（もしかして……いや、そんなことあるわけない……）」

フェイトの家にかかってきた、アリサからの空電話。それが、少女達の焦りと不安を揺るぎないものにしていた。……最悪の結末の可能性が上がったのだ。

仮に魔女の結界に囚われているだけだとしても、なのは達には手出しができない。結界を開くことができないからだ。

半ば無理やり自分で奮い立てて走るなのはに、突如念話が届いた。

「（おこつ、あいつの携帯があつたぞ！）」

「（ヴィータちゃん！…それで、どこに…？）」

走り回っているのはなのはの他に、フロイト、アルフ、ヴィータの四人。

ヴィータからの報告を受け、直ちに集合する四人。そこで彼女たちは、アリサの開いたまま放置された携帯電話を見た。
しばらく黙りこむ四人。

「…この近くに、いるんだよな？」

アルフの問い。これにヴィータが答える。

「もしくは…魔女結界にでもいるとか…いや、まさか…」
なのはとフロイトは何も言わない。

…と言えなかつた。考えたくなかつたのだ。

異変は唐突に訪れる。

地面上に落ちているアリサの携帯が、”爆発”した。

「これは…！」

魔女結界。なのはとフロイトにとつては、もうよく知つてゐる世界。つきよとの日々…ジュエルシード事件の時の悲しい別れ…これらが、再び二人の少女の心を侵食する。

「これが、魔女結界…」

「くそつ…、何だよこの気持ち悪い空間は…！」

アルフとヴィータにとつては初めての世界だ。如何に強靭な精神を持つていようと、負の感情の権化である魔女結界においては…不快感の一つくらい感じて当然だろう。

「つきよちゃん…アリサちゃん…、この中にいるの…？」

咳くなのはの心が不安につぶされかけていることは、誰の目にも分

かる。

「なのは…」

励ますフェイトだったが、彼女とてアリサやつきよの友達だ。不安をこらえてなのはを支えているのだ。

…ジュエルシード事件の時に、妹・アリシアが目の前で魔女となり、彼女を失つたこと。

この経験が、フェイトになのはを励ますだけの精神力をもたらしていたのかもしれない。

不安を必死に…必死に抑えて、少女達は進む。

しかし運命という物は、幾ら否定したといひで…いつかは向き合わねばならないものなのだ。

魔女結界内…薦にまみれた廊下を歩く四人。

今までになのは達が出会つた魔女たちとは違い、結界に入つてから魔女との遭遇までかなり距離があつた。

…彼女たちは知らないが、魔法少女の方から結界に攻め入るときは魔女まで時間がかかる傾向があり、逆に魔女から攻撃する時はすぐ魔女と遭遇する傾向があるという。

「言いにくいくらいだけど、何だかあたし達を呼んでいる気がするんだよ…、この奥に居る魔女つてやつがさ」

この、ヴィータの咳きがきつかけになつたのかもしれない。

「わたしも、そんな気がしてたの…」

「…私も。つきよ達は、助けを呼んでる

「フハイト…」

少女達は、少しづつ…今まで田を背けていた最悪の可能性と、向き合い始めていた。

今進んでいる廊下を見て、不安が確信に変わりつつあったからだ。

廊下の壁に映し出される風景…それがまぎれもなく、学校、通学路、みんなの家…なのは達がつきよと遊んでいる風景だったのだ。

魔法少女の避けられぬ運命。自分達のするべきこと…それをようやく見据え、覚悟を決めるのは達。

それ待っていたかのように、使い魔が姿を現す。

「…！」

それは緑の触手だった。

地面から姿を現した植物の薦のような触手…それが鎌首をもたげて襲いかかった。

「バルディッシュュ！」

『いきます』

いち早く反応したフエイトにより触手は切り裂かれ、動かなくなる。いや、既に四人とも戦闘の準備は整っていた。そのままで戦えるアルフを除き、デバイスを構え、バリアジャケットを着けている。

「近い、よね」

フエイトの呟きが、少女達を引き締める。

「…助けて、やらないとな

「当たり前じゃん…！」

「…待つて、つきよ…」

「今、行くから…！」

「なんだよこれ…、なんだよこれ…つー」

田の前にあるのは、巨大な塊。

無数の触手が纏まって、一つのロロニーを築いているのだ。

半球型の巨大なロロニー。その頂上に、十字架のよつたものが見える。

…磔にされて、眠っている…アリサだった。

「…どうして、こんなにならなきゃいけないのかな…」

沈黙を経て、なのはが口を開く。

「つきよちやんは、町の人たちや…友達を、一生懸命守りつとしてたのに……どうして…つ…！」

「なのは…」

「他の子たちだって…！みんな、こんなになるなんて思ってなかつたはずなのに…」

なのはは、泣き崩れていた。

今更、というわけではないが、魔法少女の悲惨な運命を再認識したのだ。…まだ幼いなのはが、これを真剣に受け止めて落ち着いていられるだろうか。

かつて友達…フェイトを魔女として失いそうになつた記憶も蘇り、なのはを苛む。

「…アリシアだつて、苦しかつたんだよね。やつと生き返れたのに、騙されて…」

自分に言い聞かせるように、フェイトもつぶやく。

ジュエルシード事件の時、フェイト自身の願いによつて蘇生した彼女の姉、アリシア。

彼女もまた魔法少女となり、…すぐに魔女となつた。フェイト自身とて、アリシアが残したグリーフシードが無ければ魔文化するところだったのだ。

「……なのは、フェイト！ボーツとするな、囮まれたぞ！」

「えつ……！？」

気付けば、周りを触手が蠢いている。

魔女となつた少女は、決して正気に戻ることが無い。戦つて、
絶望の運命から解き放つしか、彼女を救う手立てはないのだ。

「ずっと分かつてたはずなのに、やつぱり悲しこよ……」

「でも、やらなきゃ……。アリシアの時と同じ。つきよを、解き放つ
てあげないと」

示し合わせたように、背中を合わせるのはとフェイト。

「……アリサちゃんも助け出さなきゃね。絶対……生きてるから」

「……うん」

「……行くよつ……」

まずフェイトが飛び出す。

四人の中で唯一バルディッシュ・刃による攻撃が使えるフェイト。
拳で戦うアルフやハンマーのヴィータよりも、触手のようなタイプ
と戦ううえでは有利だった。

ちなみに砲撃手のなのはは本来クロスレンジよりもミドルレンジ（
中距離）・ロングレンジ（遠距離）で活躍するタイプであるため、
彼女にはあまり向いていないと言えよう。

アサルトフォーム（斧状の汎用形態）のバルディッシュ・刃を振り回し、
群がる触手を片つ端から刈り取っていく。

同時にヴィータも動き出していた。彼女のデバイスは紅い鉄槌、鉄くねがね
の伯爵『グラーフアイゼン』。バルディッシュ・刃と違つて打撃武器で
あるため、今回の魔女のような触手タイプに対しては若干不利であ
る。

「アイゼン、カートリッジロード！」

ヴィータが指示を出し、これに応えて排莢するグラーフアイゼン。

『ラケーテン・フォーム』

グラーフアイゼンはすぐさま姿を変えた。片側のハンマーへッドはスパイク状に、反対側は噴射口のように変化する。

「ラケーテンハンマアアア-----ツ-----」

噴射口が火を噴くと同時に、グラー・ファイゼン諸共回転を始めるヴィータ。回転はその勢いを増していき、程なくして一つの竜巻ができる。噴射口が一瞬ひとりきわ強く吠えると、竜巻が動き始めた。

ପାଇଁ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

猛烈な台風となつたヴィーナスが、辺りの触手を引きちぎっていく。フェイトとヴィータの猛攻により、なのは達のいる一帯が開けた。そして、彼女たちの瞳に、アリサが映り込む。

「デイバイイイーーーーーン

すかさずなのはが狙いをつけた。アリサのすぐ下…魔女本体との連

絵言を見抜いて

その間にも触手は次々と生え、襲いかかる。なのはが砲撃を終えるまでそれらを防いでいたのは……アルフのチーンバインドだった。

苦悶の表情を浮かべつつ、耐えるアルフ。

! ! ! !

砲撃が決まる。なのは達の魔法には非殺傷設定と呼ばれるものがあり、これをオンにすることで殺さずに敵に痛みと魔力ダメージを与える。魔女を消滅させることも可能だ。

しかし、今回の砲撃ではこれを解除していた。物理的な威力を伴つた砲撃は、アリサと魔女の結合部を貫き少女を引き離す。

「アリサつ……！」

それを見切り、飛び出したのは…アルフ。

アルフはジュエルシード事件の時にアリサに命を救われたことがある。そのため、今なおアリサは彼女の恩人なのだ。

アリサを抱きかかえて舞い戻る…が、アリサは気絶したまま、目を覚まさない。アリサに纏わりつく触手の切れ端が、切られてもなお生きているかのように蠢いている。

「目を覚ましてくれよ…アリサ…！」

呼びかけるアルフに、なのはは振り向かずに口にする。

「…アルフはアリサちゃんを連れて離れて。つきよは…私たちが…！」

程なくして、なのは、フェイト、ヴィータが集合する。

三人の少女に、再び纏わりつこうとする触手。そして武器を魔女に向けるなのは。

他の一人は襲う触手を払い、封じ…なのはの砲撃の補助を担当する。

なのは達には、つきよの触手が…何かを求めているようにも感じられた。

それは、新たなる捕虜かもしれないし…もっと大切なものかもしれない。

「ごめんね…つ」

なのはがレイジングハートを、フェイトがバルディッシュを、ヴィータがグラーファイゼンを構える。

…まだ幼い彼女たちにとつて、大切な人に武器を向けること…それがどんなに辛いことだろうか。

ほとんど会つていなかつたヴィータでさえ、はやてやなのは達の話を聞いて…友達になりたいと思っていたのだ。

増して、なのはとフェイトは学校で楽しく話していた仲だった。

そのつきよを、今は…葬ろうとしているのだ。

「ごめんね、ごめんね、ごめんね…」

魔力をためるなのはから零れおちたのは、一滴の涙。

永遠にも思える数秒の間…なのはは、つきよと廻りじした日々を思い返す。

何も知らなかつたとき、みんなで楽しく談笑した思い出。

つきよが魔法少女だという事を知つて、ギクシャクしてしまつた思い出。

仲直りして、共に魔女と戦つた思い出。

それらがなのはの心を駆け巡つた。

…この間にか、つきよの攻撃が止んでいる。砲撃をその身に受け
ることを認めたよう…。

『……マスター、いきましょ。…「ティバイン・バスター」』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2795w/>

魔法少女なのは マギカW ~希望の道標~

2011年11月26日18時49分発行